

根岸お行の松 因果塚の由来

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

昔はお武家が大小を帯さしてお歩きなすつたものですが、廢刀以来幾星霜を経たる今日に至つて、お虫干の時か何かに、刀箆筒から長い刀やつを取とり出して、これを兵児帯へこおびへ帯して見るが、何どうも腰の骨が痛くツて堪らぬ、昔は能よくこれを帯して歩けたものだど、御自分で駭おしくと仰しやつた方がありましたが、成程是は左様でござりましょう。なれども昔のお武家は御氣象が至つて堅い、孔子や孟子の口真似をいたして、頻しきりに理窟を並べて居おるといふ、斯こういう堅かたじん人が妹に見込まれて、大事な一人娘を預かつた。お宅は下根岸しもねぎしもズツと未の方で極ごく閑静な処、屋敷の周圍まわりは矮ひくい生垣になつて居まして、其の外は田甫たんぼ、其の向むこうに道灌山どうかんやまが見える。折しも弥生やよいの桜時、庭前の桜花おうかは一円に咲揃い、そよよと春風の吹く毎たびに、一二輪ずつチラリくと散ちって居おる処は得も云われざる風情。一ト間の裡うちには預けられたお嬢さん、心に想う人があつて旦暮あけくれ忘れる暇はないけれど、堅い氣象の伯父様が頑張つて居いるから、思うように逢う事も出来ず、唯くよくと案じ煩い、……今で言えれば肺病でござりますが、其の頃は癆ろうしやう症と申しました、寝衣姿ねまきすがたで、扱帯しごきを乳の辺あたりまで固

く締めて、縁先まで立出ました途端、プーツと吹込む一陣の風に誘われて、花卉が一輪ヒラ／＼と舞込みましたのをお嬢さんが、斯う持った……圓朝が此様な手附をすると、宿無が虱でも取るように可笑いが、お嬢さんは吻と溜息をつき、

娘「ア、……、何うして伊之さんは音信をしてくれぬことか、それにつけてお母様もあんまりな、お雛様を送って下すつたのは嬉しいが、私を斯ういう窮屈な家へ預け、もう生涯彼の人に逢えぬことか、あ、情ない、何うかして今一度逢いたいもの……」

と恨めしげに涙ぐんで、斯う庭の面を見詰ますと、生垣の外に頬被をした男が佇んで居る様子、能々透かして見ますると、飽かぬ別れをいたしたる恋人、伊之助さんではないかと思つたから、高棲をとつて庭下駄を履き、飛石伝いに段々来つて見ると、擬うかたなき伊之助でござりますから、

娘「お、伊之さん能くまア……」

と無理に手を把つて、庭内へ引込んだ。余り慌てたものだから少し膝頭を搦毀した。

娘「まア／＼此方へ」

手を把つておのれの居間へ引入れましたが、余り嬉しいので何も言うことが出来ませぬ。伊之助の膝へ手を突いてホロリと泣いたのは真の涙で、去年別れ今年逢う身の嬉しさに先

立つものはなみだなりけり。是よりいたして雨の降る夜も風の夜も、首尾を合図にお若の計らい、通える数も積りつゝ、今は互に棄てかねて、其の情漆膠の如くなり。良しや清水に居るとても、離れまじとの誓いごとは、反故にはせまじと現を抜かして通わせました。

伊勢の海阿漕ヶ浦に引く網もたび重なればあらわれにけりで、何時しか伯父様が氣附いた。

伯父「ハテナ、何うしたのだろう、若は脹満知ら」

世間を知らぬ老人は是だからいけません。もうお胤が留つては隠すことは出来ない。彼は内から膨れて漸々前の方へ糺出して来るから仕様がな。何うも変だ、様子が訝しいと注意をいたして居ました。すると其の夜八ツの鐘が鳴るを合図に、トン／＼と戸を叩くものがある。お若は嬉しそうに起上つて、そつと音せぬように戸を開けて引入れた。男はずつと被りし手拭を脱り、小火鉢の向うへ坐した様子を見ると、何うも見覚のある菅野伊之助らしい。伯父さんは堅い方だから、直に大刀を揮つて躍込み、打斬ろうかとは思いましたが、もう六十の坂を越した御老体、前後の御分別がありますから、じつと忍耐をして夜明を待ちました。夜が明けると直に塾の書生さんを走らせて鳶頭を呼びにやる。何事ならんと勝五郎は駭いて飛んで来ました。

勝「へい、誠に御無沙汰を…」

主人「サ、此方へお這入り、久しく逢わなかつたが、何時も貴公は壮健で宜いノ」

勝「ハイ、先生もお達者で何より結構ですが、何うも存じながら大御無沙汰をいたしやした」

主人「まあ此方へお出、何うも忙しい処を妨げて済まぬナ」

勝「何ういたしまして、能々の御用だろうと思つて飛んで来やしたが、お嬢様がお加減でもお悪いのがすか」

主人「ヤ、其の事だテ、去年お前が若を駕籠に乘せて連れて来た時、先方から取つた書付、彼は今だに取つてあるだろうノ、妹の縁家堀屋と云う薬店へ出入の菅野伊之助と云う一節の師匠と姪の若が不義をいたし、斯様なことが世間へ聞えてはならぬと云うので、大金を出して手を切つた、尤も其の時お前が仲へ這入つたのだから、何も間違はあるまいけれど、どうか当分若を預かつてくれと云う手紙を持って、若同道でお前が来たから、その時私が妹の処へ返詞を書いてやつたのだ、手前方へ預れば石の唐櫃へ入れたも同然と御安心下さるべく候と書いてやつた」

勝「ハイく成程」

主人「何でも伊之助と手を切る時、お前の扱いで二百兩とか三百兩とか先方へやつたそ

うだナ」

勝「エ、左様で、三百両確かにやりました」

主人「其の伊之助がもしも若の許へ来て逢引でもする様な事があつたら貴様済むまいナ」
 勝「そりやア何うも先生の前でげすが、ア、やつてお嬢さんもぶらぶら塩梅が悪くツ
 てお在なざるし、何うかお気の紛れるようにと思つて、私ア身許から知つてる堅え芸人で
 げすから、私が勧めて堺屋のお店へ出入をするようになると、あんな優しい男だもんだか
 ら、皆さんにも可愛がられ、お内儀さんも飛んだ良い人間だと誉めて居らしたから、お
 世話効があつたと思つて居ました、処がア、云う訳になつたもんですから、お内儀さんが、
 此金で堺屋の鬨を跨がせない様にして呉れと仰しやつて、金子をお出しなすつたから、ナ
 ニ金子なんざア要りませぬ、私が行くなど云えば上る氣遣いはござえませんと云うのに、
 何でもと仰しやるから、金子を請取つて伊之助に渡し、因果を含めて証文を取り、お嬢さ
 んのお供をしてお宅へ出ましたツ切で、何うも大きに御無沙汰になつてますので」

主人「ナニ無沙汰の事は何うでも宜い、が、其の大金を取つて横山町の横と云う字
 にも足は踏掛けまいと誓つた伊之助が、若の許へ来て逢引をしては済むまいナ」
 勝「へエー、だツて来る訳がねえので」

主人「処が昨夜己が確に認めた、余り憎い奴だから、一思いに打斬ろうかと思つたけれど、イヤ／＼仲に勝五郎が這入つて居るのに、貴様に無断で伊之助を、無暗に己が打つも縛るも出来ぬから、そこで貴様を呼びにやつたんだ、だから其処で立派に申開をしろ」

勝「へエー、それは何うも済まねえ訳で、本当に何うも見損つた奴で」

主人「まあ己の方で見ると、貴様は金子を伊之助にやりはすまい、好い加減な事を云つて金子を取つて使つちまつたらうと疑られても仕様がないじゃアないか、店の主人は女の事だから」

勝「エ、御尤もで、じゃア私は是から直に行つて参ります、申訳がありません、あの野郎、本当に何うも戯けやアがつて、引張つて来て横ずつ頬を撲飛ばして、屹度申訳をいたします」

其の儘戸外へ飛出して直に腕車に乗り、ガラ／＼ガラ／＼と両国元柳橋へ来まして、

勝「師匠、在宅か」

伊「おや、さお這入んなさ、い」

勝「冗談じゃアねえぜ、生空ア使つて、悠々とお前此処に坐つて居られる義理か」

伊「え、何で」

勝「何もねえ、え、おい、本当に己はお前のために、何様にか面皮を欠いたか知れやアしねえ、折角己が親切に世話アしてやった結構なお店を、お嬢さんゆえにしくじって仕まい、其の時お内儀さんが此金をと云つて下すつたから、ソックリお前の許へ持て来てやつたら、お前が気の毒がつて、以来はモウ横山町の横と云う字にも足は踏かけめえと云つて、書付まで出して置きながら、何で根岸くんだりまで出かけて行くんだよ」

伊「え、誰がお嬢さんに逢つたんです」

勝「とぼけるな、お前が行つたんじやアねえか」

伊「まアあなた、そう腹立紛れに、人の言う事ばかり聴いてお出なすつちやア困りますナ、まア行つたなら行つたになりましようが……」

勝「昨夜お前は、既に捕捉つて、ポカリとやられちまう処だツたんだ、以前はお武家で、剣術の先生だから、処がモウ年を取つてお在なざるから、忍耐をして今朝己を呼びによこしたんだが、何うしたツて己が何とも言訳がねえじやアねえか」

伊「マ、行つたと仰しやるなら行つたにもなりましようが、昨夜は何うしても行けませぬ、其の証人は貴方です」

勝「己が……何ういう」

伊「何うだツて、日暮方から来て、川長へでも行つてお飯を喰いに一緒に行けと仰しやるから、お供をしてお飯を戴き、あれから腕車を雇つてガラ／＼と仲へ行つて、山口巴のお鹽の許へ上つて、大層お浮れなすつて、伊之や／＼と仰しやつて少しもお前さんの側を離れず夜通し居た私が、何うして根岸まで行ける訳がないじゃありませんか」

勝「ウム、違えねえ、側に居たなア、何を云やアがるんで、毫碌ウしてえるんだ、あん畜生、ま師匠腹を立ちやア往けねえヨ、己は遂い慌てるもんだから凹まされたんだ、己がお前に渡す金を取つて使つたらうと吐しやアがった、ヘン、憚りながら己だツて五百両や六百両、他人の金子を預かることもあるが、三文だツて手を着けたことはありやアしねえ、其様な事は大嫌えな人間なんだ、ちよいと行つて来らア、少し待つて居ねえ」

また腕車を急がせて根岸のはずれまで引返して来た。

勝「ハイ唯今」

主人「イヤ、大きに御苦労、何うだ伊之助は居たか」

勝「エ、先生は昨夜伊之が此方へ来たと仰しやいます、昨夜じゃアありますめえ」

主人「ナニ、昨夜確に見たから、今朝貴様の許へ人をやつたんだ」

勝「へエー、昨夜なら何うしても来る訳がねえので」

主人「何故」

勝「何故つたツて、何うも誠に先生の前では、些ときまりの悪い話でげすが、実は彼奴を連れて吉原へ遊びに行つたんでげすから、何うしても此方へ来る筈がござえませぬので」

主人「ウム、それなれば何故、最初己が尋ねた時に爾う云わぬのじゃ」

勝「へイ、何うもそれがあわてちまいましたもんだから、誠に何うも面目次第もない訳で」

主人「吉原へ行つたと云うのか」

勝「へイ」

主人「宵から行つたか」

勝「へイ」

主人「それじゃア、まだ貴様欺されて居るのじゃ、吉原の引と云うのは十二時であろう」

勝「左様、一時から二時ぐらいが大引なんで」

主人「其の時に貴様を寝こかして置いて、自分は用達に行くとか何とか何とか云つて、スーッと腕車に乗つて来て夜明まで十分若に逢つて帰れるじゃアないか、貴様は伊之助に寝こ

かしにされたことを知らぬか」

勝「エ、寝こかし、成程、アン畜生」

主人「吉原と根岸では道程も僅だらう」

勝「左様、何うもあの野郎、太え畜生だ、今直に腕をおつべしよつて来ます」

又出かけて来た。

勝「師匠、在宅か」

伊「先刻の事は冗談でしたらう」

勝「ナニ冗談も糞もあるもんか、え、おい、お前吉原から根岸まで道程は僅だぜ、何で

え、白ばつくれやアがつて、人を寝こかしに仕やアがつて、行きやアがつたんだらう、枕

許へ来てお寝みなせえとか何とか云やアがつて」

伊「ウフ、寝こかしにも何にも極りを云つて居らつしやる、昨夜は些とも寝やアしな

いじやありませんか、あなたが皺枯声で一中節を唸つて、衣洗から、童子対面まで

やった時には、皆が欠伸をしましたよ、本当に可愛そうに、酷いじやアありませんか」

勝「ウム成程、寝ねえナ」

伊「それから夜が明けると朝湯に這入つて腕車で宅へ帰る間もなくお前さんが来たんで

すよ」

勝「成程、何を云やアがるんだ、あん畜生、ま師匠、堪忍して呉んな、己ア一寸行つて来らア」

又慌て、やつて来た。

勝「ハイ先生行つて来ました」

主人「何うした」

勝「何うにも斯うにも、何うあつても昨夜は来ねえてんです、彼奴も私も昨夜は些とも寝ねえんですもの、ガラリ夜が明ける、家へ帰るとお人だから、直に来やしたんで」

主人「エー、徹夜をした、ウゝム、私も老眼ゆえ見損いと云うこともあり、又世間には肖た者もないと限らねえ、見違いかも知れぬから、今夜貴様私の許へ泊つて、若に内証で、様子を見て呉れぬか」

勝「じゃアそう為ましよう」

と其の夜は根岸の家へ泊込み、酒肴で御馳走になり大酩酊をいたして褥に就くが早いかグウクウと高鼾で寝込んで了いました。夜は深々と更渡り、八ツの鐘がポーンと響く途端に、主人が勝五郎を揺起しました。

主人「オイ、勝五郎く」

勝「ハイ、ハア、ハイく、ア、お早う」

主人「まだ夜半よなかだヨ、サ此方こつちへ来なさい」

と廊下づたいに参り、襖ふすまの建附たてつけへ小柄こづかを入れて、ギョツと逆に捻ねじると、建具屋さんが上手であつたものと見えて、すうと開あいた。

主人「サあれだ」

勝「ハイ」

と睡ねむい目をこすりながら勝五郎は覗いて見ますと、火鉢を中に差向に坐つて居るは伊之助に相違ちがないから、

勝「ア、何うも誠に済みませぬ、慥たしかに伊之の野郎ちげに違ちがえござえませぬ」

主人「それ見る、然しかるに何なんで昨夜ゆうべは来る筈はずがないと申した」

勝「イエ、昨夜は何うしても来る訳わけがござえませぬので」

主人「今夜けふのは確たしかに伊之助に相違ちがないナ」

勝「ハイ、伊之の野郎ちげで」

主人「それが間違まちがうと大おお事ことになるぞよ」

勝「イエ、何様な事があつても、よ宜しゆうござえます」

主人「ウム宜し」

ソツと拔足ぬきあしをして自分の居間へ戻り、六連発銃もちきたを持来り、襖の間から斯う狙いを附けたから勝五郎は恟りびつくして、

勝「まゝ先生乱暴な事をなすつちやアいけませぬ、伊之の野郎は打殺ぶちころしても構やアしませぬが、もしもお嬢さんにお怪我でもありませんしては済みませぬから」

主人「イ、ヤ氣遣いがない」

伯父の高根たかねの晋齋しんさいは、片手に六連発銃を持ち襖の間から狙いを定め、カチリと弾金ひきがねを引く途端、ドーンと弾丸たまがはじき出る、キャー、ウーンと娘は氣絶をした様子。

晋「ソレ若が氣絶をした、早く〜」

此の物音おしごに駭おどろいて、門弟衆かどがドヤ〜と来り、

○「先生何事なんじでござります、狼藉者ろうじやくでも乱入致きたしましたか」

晋「コレ〜静しずかにいたせ〜、兎も角早う若を次の間へ連れて行き、介抱つかいたして遣つかせ」

是から灯火あかりを点けて見ると恟びつくりました。其処そこに倒れて居たのは幾百年と星霜を経まし

たる古狸であつた。お若が伊之助を恋しい恋しいと慕うて居た情を悟り、古狸が伊之助の姿に化けお若を誑かしたものと見えます。併し斯ような事が世間へ知れてはならぬとあつて、庭の小高い処へ狸の死骸を埋めて了つたという。さりながら娘お若が懐妊して居る様子であるから、

晋「ア、とんだ事になつた、畜生の胤を宿すなんて」

と心配をして居るうちに、十月経つても産氣附かず、十二ヶ月目に生れましたのが、珠のような男の児、続いて後から女の児が生まれました。其の後悪因縁の齎わる処か、同胞にて夫婦になるといふ、根岸の因果塚のお物語でござりまする。

二

何事も究理のつんで居ります明治の今日、離魂病なんかでえ病氣があるもんか、篋棒くせえこたア言わねえもんだ、大方支那の小説でも拾讀しアがツて、高慢らしい顔しアがるんだらう、と仰しやるお客様もありましようが、中々もつて左様いうわけではございませぬ。早い譬えが幽霊でございます、私などが考えましても何うしても有るべき

道理がないと存じます。先まず当今のところでは誰方どなたでも之には御賛成遊ばさうと存じますが、扱さてこゝでございませ、お客様方も御承知で居らせられる幽霊博士はかせ……では恐れ入りまするが、あの井上圓了先生いのうえんりようでございませ。この先生の仰しやるには幽霊というものには必ず無い物でない、世の中には理外に理のあるもので、それを研究するのが哲学の蘊奥うんおうだとやら申されますそうでございませ、そうして見ると離魂病と申し人間の身体ふたつが二個になつて、そして別々に思ひの事が出来るといふような不思議な病氣も一概にないは申されませ、斯こういう誠に便利な病氣には私わたくしどもは是非一度か罹りとうございませ、まア考えて御覽遊ばせ、一人の私が遊んで居りまして、もう一人の私がせつせと稼いで居りますれば、まア米櫃こめびつの心配はないようなもので、誠に結構な訳なんです、何うも左様うといやは問屋で卸してはくれず致し方がございませ。

さてお若でございませ、恋こがれてゐる伊之助が尋ねて来たので、伯父晋齋の目を掠かすめ危うい逢瀬に密会を遂げ、懐妊までした男は真実まことの伊之助でなく、見るも怖しき狸でありましたから、身の淫奔いたずらを悔いて唯々たゞく歎なげきに月日を送り、十二ヶ月目で産みおとしたは世間という畜生腹。男と女の双児ふたごでございませので、いよゝ其の身の因果と諦め、浮世のことはプツ、リ思い切つて仕舞いました。伯父もお若の様子を見て可愛そうでなりま

せんが、何うも仕様がなないので困り切つて居ります。何ほ狸なんの胤だからツて人間に生れて来た二人に名を付けずにも置かれぬから、男は伊之吉いのきち女はお米よねと名を付ける事になりました。茲こゝに一つ不思議なことには伊之吉お米で、双児というものは身体の好格かつこうから顔立までが似ているものだそうで、他人の空似とか申して能く似ているものを見ると、あゝ彼あの人は双児のようだと申しますから、真物ほんものの双児は似る筈ではございますが、男と女のお印いんが違つてゐるばかり、一寸ちよつと見ると何方どちらが何方かさつぱり分りかねるくらい、瓜二つとは斯こういうのを云うだろうと思われ、其の上両児ふたりとも左の眼尻ほくろにぼつたり黒痣ほくろが寸分違わぬ所にあります。これが泣き黒痣ほくろという奴で、この黒痣ほくろがあるものは何うも末よが好よくないと仰おしやる方もあり、親おやが子の行末いりす末を案じるは人情にんじやう左様さやうありそうな事で、お若わかはそんなことことで大層ふたり両児ふたりを可愛あがりますから、伯父おぢの晋齋しんさいはますく心を痛いため、或日あるひお若わかが前に来

晋「赤児あかは何うしたね」

若「はい、今すやく寝ねつきましたよ、伯父おぢさん本ほん当とに妙まですことねえ、この児こ達は、泣なき出ですと両児ふたり一緒いっしょに泣なきますし、また斯こうやつて寝ねるときもおんなしように寝ねるんですもの、双児ふたりてえものア斯こういうもんでしょうか、私わたしや不思議ふしぎでならないんですわ」

晋「そうさな、己も双児を手にかけたこともなし、人から聞いたこともないから知らないよハ、ハ、ハ、ハ、赤児あかが寝ているこそ丁度幸いだ、今日はお前に些ちつと相談することがあるがの、それも外のことじゃアない矢ツ張赤児の事に就つてな、此様事こんなを云つたら己を薄情なものと思うだろうが、決して悪くとられちゃア困るよ、それもこれもお前の為を思うから云うのだからね」

若「ハイ、何うしまして飛とんでもない心得違いから、いろく伯父様おんに御苦労をかけ、ほんとに申し訳がないんですわ、それに私の為を思つて仰しやることを何なんでまア悪く思うならんツて」

晋「イヤお前まへが左様そやう思つて、呉れ、ば己も安心というものだがの、斯こう云つたら心持が悪かろうが、その赤児だツて……、あの通りな訳で生れたもので見れば、何うもお前の手で育てさせては為になるまいし、今一いつとき時は可愛いとそうな氣もしようが、却かえつて他人の手に育つが子供等こどもらの為にもなろうと思われるよ、仮令よしどんな何様なん訳で出来たからつてお前の子に違ちがひないものだから、手放して他人ひとに遣やるは人情として仕悪しにくかろう、それは己も能よく察さしてはいるが……、此の子供等こどもらが独り遊びでもするようになって見な、直すぐ世間の人に後指さ、れて何なんと云われるだろうか、其の時のお前が心持は何うだろう、お前ばかりじゃないよ、

お父様とっさんお母様つかさんをはじめ縁に繋がるこの己までが世間の口にかゝらんけりやならんのだ、さア其の苦くるみをするよりは今のうち……な、それにお前とて若い身そら、是なり朽ちて仕舞うにも及ばない、江戸は広いところだから、今度の噂も知らないものが九分九厘あるよ、ナニ決して心配する事はないからね」

と晋齋がシンミリとした意見に、お若は我身あやまに過りのあることですから、何なんとも返答することが出来ません。只ジツと差し俯うつむ伏むいて思案にくれて居ります。伯父の晋齋はお若が挨拶をしないのは不得心であるのか知らんと思われる処から、

晋「お若、何うだね、得心が行かぬ様子だが、己はお前の身の為また子供等の為を思うから云うんだよ、能く考えて御覽、決して無理を云つて困らせようなんかッて云うんじゃないから……」

若「何うしまして決して其様そんなこたア思やしません、そりや最もう伯父様さんの仰しやる通り……」

と云い掛けてほろりと涙をこぼしましたが、晋齋さいとに覺さられまいと思ひますので、俄にわかに一層下を向きますと、頬のあたりまで半襟に隠れ、襟足の通つた真ま白しろな頸筋はずつと表われました。お若の胸中を察し晋齋も不愜ふびんには思いますが、ぐずぐずに済しておいては為に

なりませんことですから、眼をパチクリ／＼致しながら、少しく膝を進ませました。

世の中に何が辛いつて義理ほど辛いものはないんで、我が身を思い生れた子供のことを心配してくれる伯父の親切を察しては、それでも私は斯うしたいの彼あしたいのと、勝手な熱を吹くことは出来ませんから、お若も是非がない、義理にせめられて、

若「何うか伯父さん様の好よいようにして下さいませ、こんなに御苦労かけましたんですから……」

と申して居るうち潤うるみ声になつて参ります。晋齋もお若なんが何なんというのであろうか、若もしや恩愛の絆にからまれてダグを捏こねはせまいかと心配致し、ジツと顔をながめ挙動ようすをうかゞつて居りましたが、伯父様のよいようにと思ひ切つた模様ですから、まアよかつた得心して呉れて、と胸を撫で、

晋「あゝそれがいゝよ、己に任しておきな、悪いようにはしないからね、お前が左様諦めてくれゝば結構な訳というもんで……、実はな、大阪の商あきんど人で越前屋佐兵衛さんてえのが、御夫婦連で江戸見物に来ていなさるそうでの、何なんでも馬喰町ばくろちように泊つてると聞いたよ、この方がの最もう四十の坂を越えなすつたそうだが、まだ子供が一人もないから、何うか好いい女の児こがあつたら貰つて帰りたいと探していなさるそうだよ、大阪あつちで越佐えつささんと云

つては大した御身代で在いらつしやるんだからね、土地で貰おうと仰おつしやれば、網の目から手の出るほど呉てれ人はあるがの、佐兵衛さんてえのは江戸の生れなんで、越前屋へ養子にへえつた方だから、生れ故郷が恋しいッてえところでの、江戸から子供を貰つて帰ろうと仰しやるんだとき、それにお内儀かみさんというのも飛んだ気の優しい方だと云うことだから、米もそんなとこへ貰われて行けば僂しあわせ倅せというもんだろうと思われるし、世話するものがお前もよく知つているあの鳶頭かしらだからの、周旋なこうどぐち口をきいてお弁茶羅べんちゃらで瞞ごまかす男でもないよ、勝五郎も随分そゝつかしい事はあの通りだが、今度のことア珍しく念を入れて聞いてきたよ、あゝ、そりや間違いはないよ、こんな口は又とないからの、お前さえよくば直ぐ話しをさせて、貰つて頂こうと思うんだがね」

若「はい、伯父様さえよと思召したら、何うかよいように遊ばして……」

晋「よし、それでは承知だね、ナニ心配することはないよ」

と晋齋は直ぐ勝五郎を呼びに遣りました。さて鳶頭の勝五郎でございしますが、今町内の折れ口から帰つて如輪じよりん目の長火鉢の前にドツカリ胡坐あぐらをかき、煙草吸つてるところへ、高根のおさんどんが、

婢「鳶頭お在いでですか、旦那様が急御用があるんだから直ぐ来ておくんなさいッて……」

勝「何うも御苦勞さま、直ぐ参りやす、お鍋どんまア好いじゃねえか、お茶でも飲んでいきねえな、敵の家へ来ても口は濡らすもんだわな、そんなに逃げてく事アねえや、己ら口説アしねえからよ」

女「お鍋さんまアお掛けなさいな、今丁度お煮花を入れたところですから、好いじゃありませんかねえ、お使いが遅いなんかと仰やる家じゃアなしさ、お小言が降りやア良人からお詫させませアね、ホ、ホ、ホ、ホ、まア緩くりお茶でも召上つて入つしやいつてええ、そうですか、未だお使いがおあんなさるの、それじゃアお止め申しては却つて御迷惑、またその中にお遊びにおいでなさいよ、その時ア御馳走しますからね、左様なら何うもおおそうそさまで、何うか旦那様へもよろしく、何うも御苦勞さままで」

とお出入先の女中と思えば女房までがチャホヤ致し、勝五郎は早々支度をしまして根岸へやつて参り、高根晋齋の勝手口から小腰をかぐめ、つつと這入ろうとしましたが、突掛草履でパタ／＼と急いで参つたんですから、紺足袋も股引の下の方もカラ真ツ白に塵埃がたかツております。無遠慮な男でございますが、この塵埃を見ますとまさかに其の儘にも這入りかねましたと見え、腰にはさんでおります手拭でポン／＼とはたき。

勝「エー、只今はお使を下せえまして」

婢「鳶頭旦那様がお待ちかねですから、さアお上りなさい、お奥の離座敷に在つしやるんですよ」

とお巒さんが案内に連れられ、奥へ参りますと、晋齋は四畳半の茶座敷で庭をながめて、勝五郎の参るのを待つて入つしやる所でございますから、

晋「お、鳶頭か、よく早速来てくれたね」

勝「只今はわざ／＼のお使で、直ぐ飛んでめえりやした、へい／＼／＼、何か急御用が出来たんでげすか、また伊之の野郎が参つたんじやアげえすめえな」

晋「ハ／＼／＼、気の早い男だな、左様来られて堪るものか、昨日お出のときにお話であつた事で、些とお頼み申したいから急に呼びに上げたのだよ」

勝「へい、じや何ですか、昨日私がお話し仕やした一件……、へ／＼／＼、憚りながら先生、左様申すと口巾ツてえ言草でげすが、ごろツちやらして居アがる野郎の二三人引摺つて来りやア訳のねえことでさア、宜うごす、明日アポン／＼と打壊しやしよう」

晋「おい／＼お前は何を言ってるんだよ、私は何処も壊してくれなんかッてえ事言やしない」

勝「いけねえや、先生、昨日仰やつたあの狸の伊之をドーンとお遣なすつたお座敷を

毀こわすんでげしよう、あんな事のあつたお座敷は居心が良くねえから、ナニ外の仕事は何うでも押ツ付けてえて遣つ付けまさア」

晋「困るな早呑込みをしては、左様そうじやないのだよ、あの座敷も建直すことは建直すがの、それより先に始末を付けなくてはならないものがあるんだ」

勝「へー、違ちがえましたか、へー」

晋「そら大阪の方で子供を貰おうと仰やる方な」

勝「ウム、、、、違えねえあの一件か、良うがすとも大丈夫でえじようぶでげす、御心配ごしんぺえなせ

えますな、ナニ訳アねえや直ぐ」

晋「まあ待つてくんな、其様そんに慌てなくても宜よい」

おいそれ者の勝五郎が飛出そうとするを引止め、高根の晋齋は懇々こんくと依頼しました。そこで鳶頭も先生様があゝ云つて、己おらのようなものにお頼みなさるんだから、早く両児ふたりを片付けて上げようと存じまする親切で、直ぐ越佐さんの方へ参りまして幹旋とりもちを致すと、先方さきでも子供が欲ほいと思つてるところなんでございますから、相談は直ぐに纏まとりまして、お米は越佐の養女に貰われ、夫婦も大層喜び、乳母をかゝえるなど大騒ぎでございます。さてこれで女の方は片付いたがまだ一人いるんで、勝五郎は逢う人ごとに子供はいらねえ

かと云つてますんで、口の悪い友達なんかは、

○「オイ勝ウ、手前てまえな、そんなに子供々々と己おれだち達にいうより、好いいことがあらア」

勝「なんだ、誰か貰もらつてくれるんか……」

○「うんにやア、逆上のぼせていやがるなア此奴こいつは余うつぽど、そんなに荷厄介うするならよ、捨

やつて仕舞やア一番世話なしだぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

勝「こん畜ちき生しよう、手前てまえのような野郎が捨児すてごをするんだ、薄情の頭ず抜ぬけツてえば」

○「勝かちさん怒おこつたつて仕方がねえや、それじゃアお前まえ売うつて歩きねえな、江戸は広ひろえと

こだ、買人かいてがあるかも知れねえ、子供やこども、子供はよろしゅうございつて」

勝「こいつが又馬鹿を吐こきやがる、最もう承知がならねえ、野郎何うするか見アがれツ」

と拳をふり上げますから、傍そばにいるものも笑つて見てもいられません。

△「まあ何うしたんだ、勝も余あまり大人気ねえじゃねえか、熊くまの悪わる口は知しつてながら、

廃よせツてえば、下くだらねえ喧嘩するが外み見えじゃアあるめえ」

と仲裁をする騒さわぎでございます。勝五郎は友達が笑わらいものになるまでに熱心ねつしんになつて、

何なにうか晋齋しんさいの依たの頼みを果とそうと心懸こころけて居ゐります。すると深川ふかがわの森下の大だい芳よしと申まして、

大層おどろ中ちゆうのきく大工の棟梁むねむらがございますが、仲間うちでは芳太郎よし太郎と云うものはない。深川

の天神様で通っている男で頗る変人でげす。何事でも芸に秀でて名人上手と云われるものは何うも変人が多いようで、それも決して無理のない訳だろうと思われるのでございます。私どもが浅慮な考えから思つて見ますと、早い例が、我々どもでも何か考えごとをし居りますときは、側で他人様から話を仕掛けられましたも精神が外へ走せて居りますので、その話が判然聞とれませんかと申すようなもの、そこで御挨拶がトンチンカンとなる。そうすると彼奴まだ年も若いに耄碌しやがツたな、若耄碌なんかと仰やるような次第でげす。一寸いたしたことが之れでございませうから、物の上手とか名人とか立てられる人は必ずその技芸に熱心している／＼の工夫を凝らしているもので、技芸に精神を奪われていますから、他の事にはお留守になるがこりや当りの道理でござりませうかと存じます。それで物事に茫然然するように見えるんで、そこで変人様の名も起る訳であろうかと推量もいたされるでげす。大芳棟梁も矢張この名人上手の中に数えらるゝ人ですから、何うも一風流變つておりますが、仕事にかけたら何んな大工さんが鯢鉾立して張り合つても叶いません。今では人呼んで今甚五郎と申す位の腕前でございます。それほどのお人ですから弟子は申すまでもなく多くある。何処の棟梁手合でも大芳といえれば一目も二目もおいてほほどで、江戸中の大工さんで此家へ来ないものはない。そんなに持囃され

て居りますが大芳さん少しも高慢な顔をしない。どんな叩き大工が来ても、棟梁株のいゝ人達てあいが来てもおんなしように扱あつて居るんで、中には勃然むっとする者もありますが、下廻りあのものは自分達を丁寧ていねいにしてくれる嬉うれしさからワイ／＼やなぎばし 嘸ひだりづまして居ます。この人の女房は、柳橋やなぎばしで左ひだりづま 褌ひだりづまとつたおしゆんという婀娜物あだものではあるが、今はすっかり世帯染しよたいじみた小意気あねごな姐御あねごで、その上心掛あねごの至極たぢいゝ質たぢで、弟子でしや出入ではいるものに目をかけますから誰も悪わるいものがない。一家まことに睦むつましく暮くして居おますが、子供こどもというものが一人も無いいにおしゆんは大層淋しみしがつて居おるんで、大芳さんも好児いゝこがあつたら貰もらつて育てるが宜いいと云いつてる。或日あるひでござります。大芳棟梁おほふぢやうりやうの弟子達でしが寄よつて頻しきりに勝五郎かちごろうの噂うわさをしているのを姐御あねごのおしゆんがちらりときいて、鳶頭とんづかの勝かちさんなら此家こちやへも来きる人、そゝつかしい人ではあるが正直まことな面白い男おとこ、そんな人が肩かたを入れてる子供こどもなら万更まんげなことはあるまいと思おもいますので、大芳おほふぢやうさんに此この事ことをはなすと、

大「お前めえが好いいと思おもつたら貰もらいねえな、何なんうせ己おいらが世話せわするんじやねえから」

と云いうんで、おしゆんは直ただぐ弟子でしを勝五郎かちごろうの家うちへ迎むかえにやる。勝五郎かちごろうは深川ふかがわへ来て話をわきくと雀躍こおどりして喜よろこび、伊之吉い之きちもまた大芳おほふぢやうのとこへ貰もらわれて来きましたが、実まことに可愛かあいらしい好児いゝこでげすから、おしゆんさんは些ちつとも膝かたを下おろしません。それ乳ちちの粉こなだの水飴みずあめだのと云いつ

て育て、居ります。伊之吉もいつか大芳夫婦に馴染んで片言交りにお話しをするようになって、夫婦はいよ／＼可愛くなりますが人情でござります。只だ伊之や／＼とから最う気ちがい狂ちがいのようで、実の親でもなか／＼斯うは参らぬもので、伊之吉はまことに儻倅しあわせものでげす。高根晋齋は勝五郎の世話で両兒ふたりを漸ようよう片附けましたから、是れよりお若の身を落付けるようにして遣ろうと心配いたして、彼方あつちこつち此方へ縁談を頼んでおきますと、江戸は広いとこでげすから、お若が狸の伊之と怪しいことであつたを知らずに、嫁に貰おうと申すものが網の目から手の出る程でござりますが、当人のお若は何うあつてもお嫁に行くゆは嫌だと申し、いっかな受けひきません。晋齋もいろ／＼勧めて見ますが何うも承知しないんであぐねております。するとお若は世を味氣あじきなく思いましたやら、房ふさ／＼々々した丈たけの黒髪根元からプツ、り惜氣おしげもなく切つて仕舞いました。

三

我身わがみの因果かこを歎なげち、黒髪をたち切つて、生涯を尼法師で暮す心を示したお若の胸中を察します伯父は、一層に不愜ふびんが増して参り、あゝ可愛そうだ、まだ裏若い身であんなにまで

恥ているは……あゝこれも因縁づくだ、前の世からの約束ごとだから仕方がない、と晋齋もお若のするが儘にさせておきました。その年も何時しか暮れて、また来る春に草木も萌え出しまする弥生、世間では上野の花が咲いたの向島が芽ぐんで来たのと徐々騒がしくなつて参ります。何うもこの花の頃になりますと人間の心が浮いて来るもので、兎角に間違の起る根ざしは春にあるそうでございます。殊に色事の出入が夏の始めから秋口にかけて多いのは、矢ツ張り春まいた種が芽をふき葉を出して到頭世間へパツとするのもござりましょうか。能く気を注げて御覽遊ばせ。まア左様した順に参っております。これは私が一箇の考えではござりません、統計学をお遣り遊ばした御仁は熟知つてお出なさる事で、何も珍しい説でも何でもないんでございます、と申すと私も大層学者らしい口吻でげすが、実は何うもはやお恥かしい訳なんです、みんな御鼻眞の旦那方から教えて頂く耳学問、附焼刃でげすから時々化の皮が剥けてな、とんだ面目玉を踏みつぶすことが御座いまする、ハゝゝゝ。扱て世捨人になつたお若さんでげすが、伯父の晋齋に頼みまして西念寺の傍に庵室とでも申すような、膝を容れるばかりな小家を借り、此処へ独りで住んで行いすまして居ります。尤も伯父の家は直き近くでございますから、晋齋も毎日見廻つてくれるし、三食とも運んでくれるので自分で煮炊するにも及ばない、唯仏壇に向つて

その身の懺悔のみいたして日を送っております。花で人が浮れても、お若は面白いこともなく毎日勤行を怠らず後世安楽を祈っているので、近所ではお若の尼が殊勝なのを感心して、中にはその美しい顔に野心を抱き、あれを還俗させて島田に結せたなら何様であろう、なんかと碌でもない考えを起すものなどござりました。丁度お若さんがこの庵に籠る様になつた頃より、毎日々々チャンと時間を極て廻つて来る門付の物貰いがございまして、衣服も余り見苦しくはなく、洗いざらし物ではありますが双子の着物におんなし羽織を引掛け、紺足袋に麻裏草履をはいております、顔は手拭で頬冠をした上へ編笠をかぶつてますから能くは見えませんが、何でも美男だという評判が立ちますと、浮気っぽい女なんかはあつかましくも編笠のうちを覗き、ワイ／＼という噂が次第に高くなつて参り、顔を見ようというあだじけない心からお鳥目を呉れる婦人が多いので、根岸へ来れば相応に貰いがあるから、それで毎日此方へ遣つて参るといふような訳になる。物貰とは申しますが、この美男はソツと人の門口に立つてお手元は御面倒さまなどとは云わないで、お鳥目を貰う道具がござります。それは別に新発明の舶来機械でもなんでもないんで、唯一挺の三味線と咽喉を資本の門付という物貰いでござりますが、昔は門付と申すとまあ新内に限つたように云いますし、また新内が一等いゝようではりますが、此の男の謡つて来

るものは門付には誠に移りの悪い一中節ですから、裏うら店だ小店なの神さん達が耳を喜ばせることはとても出来ませんが、美男と申すので惣そう菜ざいのお銭あしをはしけて門付に施すという、とんだ不了簡な山の神なんかゞ出来て、井戸端の集会にも門付の噂が出ないことがないくらい。斯ういう不心得な女が多く姦まお通とこなんかという道ならぬことを致すのでございませう。一中節の門付はそんなことには些ちつとも頓とん着じゃくはしませんで、時間を違ちがえず毎日廻つてまいり、お若さんの閉籠とじこっている草庵そうあんの前に立つて三味線弾くこともありますが、或日の事でございました、お若さんが生垣のうちで掃除をして居りますと、件の門付くだんは三味線を抱いつて例の通り遣つて参り、不審そうに垣の内をのぞきこんで、頻しきりと首をかたげて思案をいたして居りましたが、また伸上つて一生懸命に見ています。此方こちうのお若はそんな事は少しも知りませんが、セッセと掃除を了おわり、ごみを塵取りに盛りながら、通りの賑にぎやかなのに気が注ついてフイト顧みかえ盼えんりますと、此の頃美男びなんと評判のはげしい一中節の門付が我を忘れて見ておりますから、尼さんにこそ成つていきますものゝ未だ年も若く、修業の積んだ身というでもありませんから、パツと顔に紅葉もみじを散らしそうく々々庵室に逃げこみました。左様そうすると門付も立去つたらしく三味線の音色が遠く聞えるようになりまして、お若の尼はドキン／＼とうつ動悸どうきがやつと鎮まるにつけても、胸に手をおき考えれば考えるほ

ど不思議で堪りません。何うも訝おかしいじやないかあの門付、あんなに私を見ているという
 は訳がわからない、此方こちらの気のせいかな知らんが、顔立といい年格好といい伊之助さんに悉そ
 皆つきりなんだから、イヤ／＼左様そうであるまい、あの人があんな門付に出るまで零落おちぶれるとい
 うことはない筈、あゝ怖おそろしや／＼又も狸か狐にだまされた日にやア、再び伯父様に顔合せ
 ることが出来ないというもの、それにしても訝おかしい、あの時は此方こつちで伊之さんの事ばかり
 思つていて逢あいた度々々とそればかりに気を揉んでいたから、畜生なんかに魅入られたんだ
 けれど、今度はそうでない、私も心に懸らない事はないが、あゝいう事があつては、伊之
 助さんも愛想をつかしたろうと諦めちまつたから、些ちつともそんな気はないに、今日のあの
 門付、何う考えて見ても不思議でならない、と悶え苦しんで居りましたが、あゝ左様そうだ、
 仮令たとえどんな者が来ようと身を堅固かたにしていさえすれば恐いことも怖いこともない、若しも
 明日あした来たら疾とくと見てやろう、此方こちらからお鳥目でもやる振ふりをして、と待つておりましたが、
 丁度その時刻になりますと、チンツンチンという撥ぼちあたりで三味線の音ねが聞え、次第に
 近く成つて参りました。あゝ来たなと思えますから、お若さんはお捻ひねりをこしらえ待つてお
 ります、例の門付は門口にたつて三味線は弾いておりますが唄はうたいません、上手な師
 匠しやうがやつても何うも眠気のさすが一中節でげすから、素人衆……エー旦那方が我れ面白の

人困らせ……斯ういうことを申しますと暗の夜がおつかないんでげす。十二あの野郎生意氣をいいアがつて、向う脛ぶつばらえなんかと仰しやるお気早な方もございませうが、正直に申すとまア左様言つたようなもので、扱て門外にたちました一中節の門付屋さんでげすが、頻りに家の内をのぞいて居ります。お若もこのようすが如何にも訝しいと思うんで障子の破れから覗いております、其の中門付屋さんは冠つてます編笠に斯う手をかけまして、グツとあげ、家を見ますときお若さんは顔をはつきり見ました。すると驚いて障子をはがらり開けたんで、門付屋も恟りして顔を隠しまする。

若「もしやあなたは伊之助様じゃなくつて」

伊「そう仰しやるはお若さんでげすね、何うしてそんな風におなんなされました」

若「まアお珍らしい、貴方こそ何うしてそんな事を遊ばしますのでござります」

伊「これには種々の理由があつて……今じゃアこんなお恥かしい形をしていますよ、あなたこそなんだつてお比丘さんにはお成んなさつたのでげす」

若「私にもいろんな災難が重なりましてね、到頭斯ういう姿になりましたんですよ、それじゃア私がつんだ目にあつた事をまだ御存知ないんですか」

伊「些とも知らないから、実に恟りましたよ」

若「おやまア左様ですか、此処には誰もいないんですから遠慮するものはありません、お上りなさい」

とお若さんは伊之助を奥へ引張りあげました。段々様子をきいて見ると、お若が狸を伊之助と心得て不所存をいたしたことも知らぬようでげす、初めは私に気の毒だと思つてシラを切つているのだらうと思つてましたが、何うも左様でないらしいところがございますから、お若さんは根どい葉どいを致す、伊之助もきかれて見れば話さない訳にも参らぬところから、

伊「エー斯うなんですよ、あのお前さんとの一件がばれたんで、鳶頭から手切の相談さ、ところで私もダグを捏ねようとア思つたんだが、イヤ／＼左様でない、私ら風情で大家のところでおもたすを捏ねようとア思つたんだが、イヤ／＼左様でない、私ら風情で大家の嬢様と一緒にならうなんかツてえのは間違つてゐる……こりやア今切れた方が先方様のお為と思つたもんだからね、鳶頭の言うなり次第になつて目を眠つていたんでげす、その後のことで……左様さ二月も経つてからだツたでしようよ、鳶頭が慌てくさつて飛びこみ、私がお前さんのいなさる根岸へ每晚忍んで逢いに行くてえじやないか、あんまり馬鹿々々しいんで鳶頭をおいやらかしてやツたんでげす」

と云われてお若は深く恥いりましたか、俄に真赤になつてさし俯いております。伊之助

はそんなことは知りませんから、

伊「ほんとにあの鳶頭のあわてものにも困る……」

と一寸とお若を見ますると変な様子でげすから、伊之助も何となく白けて見え、手持無沙汰でありますので、お若さんも漸う気が注いで、

若「それはそうとして何うして其様ことを……」

伊「イヤ何うも面目次第もない、恥をお話し申さないと解らないんで、丁度あの鳶頭が来た翌日でした、吉原の彼女と駈落と出懸けやしたがね、一年足らず野州足利で潜んでいるうちに鼻は梅毒がふき出し、それが原因で到頭お目出度なつちまつたんで、何時まで田舎に燻つてたつて仕方がねえもんだから、此方へ帰りは帰つたものゝ、一日でも食わずに居られねえところから、抛ろないこの始末、芸が身を助けるほどの不仕合とアよく云う口ですが、今度はつく／＼感心してますよ」

若「それはくゞさぞお力落し、御愁傷さまで……」

伊「悔みをいわれちや、穴へでも這入りてえくれえでげすが、それにしてもお前さんこそ何うして其様お姿におなんなすつたんですえ」

場数ふんでまいつた蓮葉者でございましたなら、我が身の恥辱はおし包んで……私は

一旦極めた殿御にお別れ申すからは二度と再び男に見えぬ所存で……これこの通り仏に誓う世捨人になりました、伊之さん何うか察して下さいとほろりとさせる処でげすが、其様ケレン手管てくだなどは些ちつともないお若さんですから、実は斯々かく／＼しか／＼云々／＼の訳あつてと眞実まことを話します。伊之助も恟りびつく仰天いたして、暫らくの間は口も利きませんでした、それも矢つ張り因縁というものでしょうから心配なさることはないと思さめ、此の日は何事もなく帰ります。次の日もまたお若さんの家へ寄つて行く、その次の日もまた寄るといふようになる、お若さんも元々いや厭な者が来るんでないから其の時刻を待つ、伊之助も屹度きつと来る、何時いつ何ういう約束をするといふでもなく、何方どちらから言出すといふでもなく、再び焼やけど棒杭つくくいに火がつくこと、相成りましたが、扱さてこれからは何うなりましょうか、一寸ちよいと一服いたし次席でたつぷり申し上げましょう。

四

さて引続き申上げております離魂病のお話で……因果だの応報だのと申すと何だか天保度のおはなしめいて、当今のお客様に誠に向きが悪いようではげすが、今日こんにちだつて因果

の輪回りんねしないという理由わけはないんで、なんかんと申しますと丸で御法談でも致すようで、チーン……南無阿弥陀仏といい度たくなり、お話がめいつて参ります。と云つてこのお話を開化ぶりに申上げようと思つても中々左様そうはお喋りが出来ません。全体が因果という仏くさいことから組立られて世の中に出たんでけすからね。何も私わたくしが好すこのんで斯様かようなことを申すんではありません。段々とまア御辛抱遊ばして聴ごいて御覽ごらんじろ、成程と御合点なさるは屹度きつとお請合申します。エーお若伊之助の二人は悪縁のつきぬところでござりましょうか、再び腐れ縁が結びますると人目を隠れては互に逢引をいたす。お若さんの家うちは夜分になると伯父の晋齋たまたが偶たまさか来るぐらいで、誰も参るものはございませぬ、尤も当座もつとは若いお比丘さん独りで嘸さぞお淋さびしかろうなぞと味なことを申して話しに押掛けて参つた経師屋きようじやもないでもなかつたが、日が暮れると決して人を入れないので、左ほど執心して百夜もくや通よいをするものもなかつたんでしよう。只今も申します通り夜分になれば伯父の目さえ除よければ憚はるものはないんでけすから、お若さんも伊之助も好い事ことにして引きいれる、のめずり込むというような訳になつて……伊之助は大抵お若さんのとこを塹ねぐらにしておりました。始めのうちこそお互いに人に見られまいと注意いたすから、夜が明けはなれると伊之助は飛び出すので、近所でも知らなかつたが、左様都合そうのいゝことばかりはないものでな。惚ほれ

た同士が二人きりで外ほかに誰もいないのでげすから、偶たまには痴話や口説くせつで夜更しをして思わぬ朝寝もしましょうし、また雨なんか降るときはまだ夜が明けないと存じて、

伊「もうおきる時分だろう、雨戸のすき間があかるくなつて来た」

若「十二まだ早いよ、大丈夫だから……お月夜であかるいんだわ、今から帰らなくツてもいゝツてえば、私アねむくつて仕様がないじやないかね、モガくおしでないてえば」とお若が起しませんから、伊之助とて丁度寝心のいゝ時節、飛起きたくはありますまい。すると……、毎朝照つても降つても欠かさずに屹度きつと参る納豆屋の爺さん、

納「納豆ーなつとー……お早うさまで」

若「おや大變おそいよ、納豆やの爺さんが来るようでは……とんだ寝坊をしたね」

伊「それ御覽な、仕様がないじやないか、伯父さんのところから御飯でも持つて来る人に見付みつつちやア大變だ、近所の人は皆みんなな起きてるだろう……あゝ弱つたね、本當ほんとに困つちまつた」

若「私だつて全く夜が明けないと思つたからだわ、何うするの伊之さん……今日は此家こゝにおいでな、こんなに雨が降つてるから伯父様さんも来やアしまい、お前だツたつて帰るも大變だわ」

伊「そりや己おのらの方にやア願ねがつたり叶なつたりだけれどな、若もし来こられた日にやアそれこそ大変なわけ、一旦手切まで貰もらつて分れたんだから」

若「それも左様そうだねえ……中々頑固だから六ヶ敷むすかしいことを云うかも知れないから、困こつたね」

と云つているうちに伊之助は起あがりて帯を脱ぬぎ《し》めておきますると、表をトン／＼と叩くものがございまして、二人は恠びつりいたして、お若さんは手早く床をあげ、伊之助を戸棚へ隠し、やつと心を落付け、表の戸をた／＼を聞えぬ振して態わざと縁側の戸をガラ／＼明けております。表では頻しきりにトン／＼と叩いて、

吉「オイお若さん何うしたんだい、こんな寝坊することがあるもんか、早く開けて下さ
いよ」

若「おや吉澤よしざわさんですか……何うも御苦労でしたことねえ、今朝はとんだ寝坊をしま
してねえ……大層おた／＼かせ申しましたか、ほんとにすみませんこと」

吉「ハ、ア珍めづらしいですな、あなたがこんなに朝寝をするは……ハ、ハ、ハ」

例れいの通り飯櫃おほちと鍋を置いて帰つたので、まア好よかつた胸むねなで下おろしまして、それから伊
之助も戸棚より這出して参り、直ぐに帰ろうというを、お若は丁度あつたかい御飯が来た

とこだからと、無理に止めまして少し冷めた味噌汁をあつたため、差向いで朝飯を仕舞まする。

若「伊之さんこんなに降つて来たから……大丈夫来やしないわ、帰るにしても些と小止になるまで見合してお出でないとビシヨ濡になっちゃうわ」

伊「まさか此の降りに伯父様が見廻りもなさるまいとア思うがね、あんな人ではあるし、今朝来た使いが変だと思やアそう云うだろうから油断はしてられないよ、見付つて仕舞つてから幾ら悔しがつても取つて返しが付かないから」

若「そうねえ」

とは申しますものゝ、ドシ／＼雨の降つてる最中に可愛い情夫を出してやるは、何うも人情仕悪いものでございますんで、お若さんは頻りに止めますから、伊之助もそれではと小歇になるまで見合することにいたし、立膝をおろして煙草を吞もうといたすと、ギア／＼

＼／＼＼という音が庭でするは、丁度傘をさして人の立てゝもいるように思われますんで、疵もつ足の二人は驚きあわて顔見合せましたが、がらりと障子をあけて誰が来たと確めることが出来ません。そうかと申して伊之助が今逃げ出してはます／＼疑われる種とおもいますから、うかといたした事をして毛を吹いて疵を求めるも馬鹿々々しいと、只二人とも

はらくと胸を痛めて居りますと、暫くして縁先で咳ばらいをいたすものがある。お若も伊之助も最う堪らなくなりましたから、先ず伊之助が逃げ出しにかゝるを、

○「二人とも逃げるにやア及ばねえ」

とがらり障子をあけて這入つてまいつたは別人ではございません、そゝつかしやのとびが頭しら勝五郎でげすから、ハツと驚きましたが、まだしも伯父の晋齋でないだけが幾らか心に感じ方が少ないと申すようなものではあるが、何なんにいたせ二人とも面目ない始末……とんだところへと赤面の体ていで差しうつぶいて居ります。勝五郎も驚きましたね、まさか伊之助が此処こゝへ来ていようとは夢にも思いませんから、暫くはじろりく二人の様子を見ておりましたか、

勝「師匠……いやさ伊之さん、まア何うしたんだ……何うして此処こゝに来ているんだ」

と申して膝を伊之助の方へすゝめますが、何なんとも返答をいたす事が出来ないんで……矢張黙つてモジくいしきと髻むすばかりを動かし、まるで猫に紙かんぶくろ袋あとをきせましたように後あとずさりをいたしますんで、勝五郎は弥いよく々せ急いぎたちまして、

勝「エ、何うしたんだな、お前めえさんがこんな戯ふざけた真似をしちやア済むめえが、お前さんばかりじゃねえや、私わっちが第でえいち一いちお店たなに申訳がねえ、手切金までとつて立派りつぱに別れておき

ながら……何てえこつたアな、オイ伊之さん何うしたんだ」

と今にも掴みかゝらんとする権幕でげすから、お若さんも恟り、黙っていられません。

若「鳶頭、そんなにお云いでないよ、伊之さんが悪いんじゃないから、これというも皆私の心からで無理に伊之さん呼びこんだのだよ、何うした因果か知らないが、何うも伊之さんのことばかりは思い切ることが出来ないんだからね」

勝「へエーお嬢さんから、野郎を引ずり込んだと仰しやるんでげすか」

若「お前さんでも貞婦両夫に見えずということがあるは知ってるでしょう、私だって左様だわ、一旦伊之さんとあんな交情になつたんだもの、世間の義理で切れましようと思つたつて、心から底から切れるなんかツてえ氣は微塵もありやアしないのさ、ひよんなことがあつたからね、これでは伊之さんに邂逅つても愛想をつかさされるだろうと悲しく思つてるを、伯父さんは些とも察してくれず、お嫁にゆけのなんのとうじやないか、私の良人は三千世界に伊之さんより外にないんだものお前、仮令嫌われたつて愛想をつかさられたつて、二人の良人は持ちますまいと心に定めてこんな姿になつてるんだからね」

勝「こりや驚きやした、手放しの惚氣てえのア、じゃア何ですな、お嬢さんは野郎を引ずり込んだつて好いと仰しやるんでげすね」

若「あれまア、引摺りこんだなんて、そんな体の悪いことをお云いでないよ」

勝「だって左様じゃげえせんか……、これが伯父さんに知れたら何うなさる御了簡でげすえ、伊之さんお前だつて左様じゃねえか、いくらお嬢さんが何と仰しやるにしろよ、ノメく、這入りこんでそゝのかすてえことはねえ筈」

と鉾先は伊之助に向きます。

伊「鳶頭まことに面目ない……、私もお若さんが尼になつていなさりようとは思ひもかけず、此処らをうろつくうちにお嬢さんが伊之さんかというような訳から、段々と様子をきいて見れば私風情に操をたて、下さるお志が何うも知らぬと申しにく、鳶頭の前だが誠に申訳のない次第」

勝「なんだツて、エ、お前までが一緒になつて惚けるてえことがあるもんか、コウ伊之さんよく聞きねえ、私アお前さん方の為を思つて飛で来たんだ、今日雨降りて丁度仕事かねえから先生のところへ来てるとよ、書生さんが此処から帰つて来て、お若さんのところには泊客があるらしいと云つたを、先生がきいて、若い女のところへ泊客たア捨ておかれん、己が直ぐ往つて実否を正して来ると支度をするじゃアねえか、私アまさか伊之さんが来ていようとは思わねえけれど、お嬢さんだつてまだ若い身そらだ、若しひよつとどんな虫が

咬りついたか知れねえと思つたからよ、十二旦那がいらつしやるまでもねえ私が見届けて参りますから……来て見ればこれだからね実に悔りしたじやねえか、エ、これが若し旦那に來られて見ねえ何様騒ぎになるか知れたもんじやねえ」

と云れてお若は忽ち震いあがりましたが、態と落付きはらつて、

若「鳶頭後生だから、伊之さんの來ていることはねえ、私が一生のお頼みだから」

勝「エ、そりやア宜うがすがね、困ツちやうなア、切れるツて云つたつて此の様子じやアとても駄目だ、これが何時までも分らずにいりやア私も知らん顔していやすが」

伊「鳶頭まア左様云わずと何うかね、今日のところは見逃しておいておくんない、私もまたお嬢さんをお諭し申して綺麗さつぱり諦らめるようにするからねえ、決してお前さんの面は潰さないから」

というくと勝五郎を賺しこしらえるうちに、切れるような言葉あるをきゝましたお若は、プツと頬をふくらすのを見ましたから、眼付で合図いたし、ヤツと勝五郎を追いかえますますると、

若「伊之さん何うしようねえ、この事が伯父さんに知れた日にやア大変だから」

伊「さア何うしたら宜かろうか知らん」

若「いつその事、私をつれて逃げておくれでないか」

伊「そんな事をしては猶更すまねえから」

若「あれさ、此様こんなことになつて、済むのすまぬということがあるものかねえ、私がこんな形なりだからお前さん外聞ぐわいぶんがわるいんで」

伊「ナニ其様そんなことはないけれど、斯うして来ているのさえ面目ないのに、其の上また連出しては」

若「嫌いやなんだね、嫌いやならいやでいゝよ、お前さんに捨てられちやア」

と突然いきなり仏壇の引出から剃かみそり刀を取出し自害の体に見えます。お芝居などでもよく演やるやつでございませうが、先まず初めにお姫さまが金魚の糞うんこほどぞろ／＼腰元をつれ、花道で並び台詞ざりふがすみ、正面の床かあるは引廻したる幔幕まんまくのうちへ這入る、そうすると色いろ奴やつことか申してな、下司げす下郎の分際ぶんさいで金糸きんしの縫ぬいいあるぴか／＼した衣装で、お供おくに後おくれたという見得いで出てまいります、舞台ぶたいへ来ても最もうお姫様もお供の影もないのでまご／＼してゐるを好寸法いに出来てるもので、お姫様が其処そこへたつた一人で出懸けてまいり、これ何平とやら雨の降るほどやる文を返事もしないは情つれないぞや、四辺あたりに幸い人はなし、今日こそ色よい返事をなんかんツて……あつかましくもジツと下郎の側へ寄り添い、振袖を肩のと

ころへかけるを合図に、下郎は飛びのき不義はお家の御法度ごはつと、とシラ／＼しく言えば、
 女の身で恥かしいこと言い出して殿御に嫌われては最うこれまで、と懐劍ひきぬき自害の
 模様になるを、下郎は恠びつくりして止めると、そんなら私の望み叶えてたもるか、さアそれは
 ……叶わぬならば此の儘、さアくくくと糶せりつめ詰のちた後は男がそれまでに思召すのをなどと
 申して、いやらしい振になつて騒ぎを起しまするが、女の子が男を口説秘法くせきくは死ぬという
 が何より覲てきめん面めんでげす。併しかし当今の御婦人さま方にはそんな迂まわりどお遠あそぼいことを遊あそす方は決
 してございますまい、ナニ惚れたとか腫れたとか思いますと直しきく々に當つて御覧なさる。
 先方さきの男が諾うんといえば自由結婚だなどと吹聴あそばし、また首かぶりをふればナニ此処こゝな青瓢箪
 野郎、いやアに済とどしていやがる、生意氣だよ、勿体なくも私のような茶人があればこそ口
 説とどもしたのさ、一生のうち終り初物で恠とまじりして戸迷いしあがツたんだらう、ざまア見あが
 れと直ぐ外の男へ口をかけるというように淡泊になつて参りました。これははや何うも飛とん
 でもない事を申しまして、本書をお読みなさる御婦人様方には決してそんな蓮ツ葉な、薄
 情きわまるお方はお一人でもある氣遣いはございませぬ。この本を見たこともないと申す
 阿魔や山の神には兎角やからそんな族やからが往々あつて困りますよ、ハ、ハ、ハ。何うも余事にわたつ
 て恐れ入りました。扱さて伊之助でございしますが、お若さんが連れて逃げてくれると申しま

したを、義理だてをして 捌々しく相談に乗らないところから、男を諾といわする奥の手をだし、自害の覚悟を示したのでありますから、伊之助も最う是非がございません。

伊「えい危ない、何だつてそんな真似を、まアこれをお放しなさいよ、はなしは何うにでもなることだから」

若「いゝえ、お前さんは私に飽きたから、それで」

伊「これさ、まアそんな強情をいわずと、あゝ困るなア、あゝまた、危ないゝ、逃げろなら逃げもするから、まア刃物はお放しなさい」

若「それでは屹度だね、屹度一緒に逃げておくれだねえ、屹度……屹度」

伊「あゝよろしい、仕方がない、逃げますともゝ嘘をつくもんですか」

と漸うお若を宥めましたんで、ホツと一息つき、それでは手に手をとつて駈落と相談は付けたものゝ、たゞ暗雲に東京をつツ走つたとて何処へ落著こうという目的がなくてはなりません、お若と伊之助はいろゝと相談をしますが、何うも頼みにして参る人がないハテ困つたものであるが、誰か親切らしい人はないものかと二人とも無言で頭をなやまして居ります。そうすると伊之助は莞爾いたして、

伊「いゝ処がありますぜ、東京から遠くはありませんがね、私が行つて頼んだら情なく

も断るまいと思うんで、あれなら大丈夫だろう」

若「そう何処どこなの、お前さんの知つてる家うちならいゝけれど、余あんまり近いと直ぐ知れツちまつてはねえ、何処、何処なの」

伊「ナニ知れる気遣いはない……鳶頭とんづこだつて知つてる筈はなし、伯父おじいさんだつて猶さら御存知の気遣いはないとこ、あゝ好いとこを思い出した」

若「お前さんばかり、好とこだ〜と言つて、一体どこなんだねえ」

伊「何処ツてえでもねえが、私わしが子供のころに里にやられていた家うちで、今じゃア神奈川の在にはいつて百姓ひやくしやうをしているんさ、まア兎も角もそこに落著おちいて、それから緩ゆるり相談することわたくしに仕ましようよ」

若「おや左様さようなの、お前さんの里に行つてた家、じゃアその人は余程よつほどのお婆おばさんになつてるだろうね、こんな風をして行くも何なんだか極きよくりが悪いけれど、外とちに頼たのむものがないんだからねえ」

伊「ナニさ、心配しんぱいしなさいよ、爺おやい婆おばアの二人暮ふたりしでいるんだから、私わしが頼たのめば一時いちじは小言せうごんをいうかも知れないが、憎にくいとは思おもうまいから何なんうにか世話せわをしてくれるよ」

若「そうかねえ、それでは其処へ行くことにしましようが、今から直ぐ二人で此処を出ては人目にかゝつてよくないがね、何うしよう」

伊「昼日中二人で出てはいけない、今夜の仕舞汽車で間にあうように、そして横浜まで落延びておいて、明朝一緒に往こう」

若「あゝ、だけれど先方で嘸ぞ恟りするだろうね、まあお前さん何てツて往くつもりなの」

伊「ハゝゝゝ、詰らぬ心配したつて仕方がないよ、外に何とも言方がないじゃアないか、矢ツ張り駈落をして来たというより仕様がないのさ」

若「ホゝゝゝ、何だか極りが悪くつて」

と相談は極りましたから、それでは今夜と伊之助は分れて根岸を出てまいります。お若さんは今夜駈落を為しようというんですから、そわくとして手荷物 of 支度をしてお在なさる。すると丁度お昼すぎに伯父の晋齋がぶらりと遣つて参つたんで、お若さんはギョツとしました。今朝鳶頭に伊之助の来ているところを見付けられたあとですから、てつきり伯父が私の様子を見に来たにちがいない、鳶頭がまさか明白に伊之さんの来ていたことは言いませまいとは思いますが、若しひよつと伯父さんに言ったので来たのではないか知らん、

何にしても悪いところへ来たと変な顔をしております。晋齋は朝の様子をきいたのだから聞かぬのだから分りませんが、常にかかわらず莞爾はして居りますが、何うも腹のうちに憂いのあるらしく思われますは、眉のあいだに何となく雲でもかゝっているように、うるさいという風が見えるので、お若さん一層の心配でたまりませんから、お腹の中ははらくとしてひっくりかえるようではげす。それを見せてはならぬと十分に注意は為さいまするが、なか／＼見せずにおくと申すことは出来ないもので、余ッほど偉い人でなければ喜怒哀楽を包み隠していることは出来ないからです、晋齋も素振の訝なのには心はついて居りますが、がみがみと小言を申したりなんかすると間違いでも仕出来さんに限らないと、物に馴れておいでなさるお方でげすから、態と言葉づかいも和らかに、

晋「お若、なんだ片付けものを始めたのか、ハ、ハ、ハ、如何に世捨人になつても女というものは、矢つ張りそんな事をいたしておるか、こんだは大分頭も生えたようだな」

お若は伯父の底気味わるい言葉にハツと思つて胸はおどりましたが、覺られまいと態と何気なく

若「昨日から剃りましたよと思つて居るんですけど、何だか風邪気のようにですから、本当に汚ならしくなつたでしょう」

晋「感冒をひいたか、そりや大切にしないと宜しくないよ、感冒は万病の原と申すからの」

若「はい有難うございます」

晋「今日のは些とお前に相談することがあつて来たのだから、まあ此処へ来なさい」

と申されていよく心配でなりません。さては勝五郎が喋ったにちがいない、こんなことゝ知つたなら伊之さんと直ぐ駈落をしたもの、まさか伯父さんに言付けはしまいと思つてたはとんだ油断だつた。まだ何事を言われるか知れもしないうちから、お若さんは勤ぐつて、モジ／＼していなされたが、伯父の晋齋が此処へ来いというのでげすから、出ずに居られませぬので、おず／＼晋齋の前へ手をつき、

若「伯父さん改まつて何の御用でござりまするか」

晋「別に改まつて申すほどの事でないが、今日私のうちを高徳な坊さんがお出でなさるから、お前にもお目にかゝらせようと思つて迎いに来たんだ」

と云われてお若は当惑いたしました。今夜は駈落をする筈で伊之助と手筈がきめてあるんですもの、何うかして断りたいといろ／＼に考えましたが、即座によい智慧は出ませんから、ますます困つて何とも返答をいたすことが出来ない。そうすると晋齋はじろりとお

若の様子を見て吸^{すい}かけた煙草もすいません。お若だつてそう何時^{いつ}までも黙^{もく}つては居^いられな
いから、

若「折角でございませうが、今日は御免を蒙^{まう}りとうございませう、初めてお目に懸^かるお方に
頭のこんなになんか生^なえたなりでは失^し礼^{れい}で」

晋「イヤそれなら少しも苦^{くる}しゆうない、そんな心配をするには及^{およ}ばない、先^{さき}方が俗^{ぞく}人^{にん}か
なにかではなし、病中だとお断^{ことわ}り申^ませば仔細^{しじゆ}はないよ、ナニ私^{わし}から能^{あた}くお詫^{わが}をしてやるか
ら、あゝ、いとお方^{はな}のお談^{はなし}をきいておくはお前^{まへ}の為^{ため}だ、世捨^{よす}人^{にん}になつていながら恥^ちかしいな
んかてえ事^{こと}があるものか、私^{わが}が連^つれて行^ゆかねば到底^{とて}も来^きそうもない、さア一^{いっ}緒^{しょ}に來^きなさい」
と無理^{無理}やりにお若^若は伯父^{おぢ}の家^{うち}へ連^つれて行^ゆかれましたから、さア心配^{しんぱい}でく堪^たらないは今
夜の約^{やく}束^{そく}でげす。早^{はや}く坊^{ぼく}さんが來^きて歸^{かへ}つてくれないと伊^い之^のさんに濟^すまないとそればかりに
氣^きを取^とられ、始^{はじ}めの中^{うち}は家^{うち}の様子^{ようす}に氣^きもつきませんでした、氣^きを落^{おち}著^つけて考^{かん}えて見^みます
れば不^ふ審^{しん}でげす。それほどの珍^{ちん}客^{かく}があると云^いうに平^{へい}常^{じょう}の如^{ごと}く書^か生^{せい}ばかりで手^て伝^{でん}の人も來^きて
いず、座^ざ敷^{しき}も取^と散^ちした儘^{まま}で掃^{はき}除^ぞする様子^{ようす}もありませう。お若^若はだんく訝^{おかし}しくなりませ
う、始^{はじ}めて伯^{おぢ}父^のの計^{けい}略^{りやく}にかゝつて、引^ひき寄^よせられたことを覺^さりました。さア大^{だい}變^{へん}、これ
では折^せ角^{かく}伊^い之^のさんに約^{やく}束^{そく}したことも反^{はん}故^こになり、さぞ恨^{うら}まれるであらう、何^{なん}だか口^{くち}振^びりが

変だとは思っていたが、伯父さんも余りのなされかた、欺して私を引きよせるとはそでない成されよう、あゝ仕方がない、斯うなりやア隙を見て逃げ出すまでだが、何うか伊之さんに約束した刻限まで、あゝ何うしたら逃げ出されるか知らん、うっかりした事して押えられては仕様がな、何うか甘く脱け出したものだ、と頻りに考えこんでおります。伯父の晋齋も別段小言は申しませんで、只だ監督して目を離さない。これにはお若さんもほとと困りましたが、坊さんの事などは聞きもしませんし言いもしませんで、茫然鬱いでおりますと、書生は今までお若のいた庵室を片付け、荷物を晋齋のところへ運んでまいりましたので、

若「伯父さん私の荷物を此方へ持つてお出でなすつて何うなさるの」

晋「ハ、ハ、ハ、恟りしたか、都合があつてお前は当分私の家におくのだよ」

若「はい」

と言つたきり何にも言わず、頭痛がするといつて顔をしかめます。晋齋も心の中を察している見え、心持がわるくば寝るがいと許しますので、お若は褥をとつて夜着引つ被りましたが、何うして眠られましよう、何うぞして脱出したいと只一心に伯父の隙をねらつて居りますが注意に怠りはございません。さて伊之助でございしますが、根岸を立出で

ましてから我が宿といたして居る、下谷山伏町の木賃宿上州屋にかえつても、雨降でげすから稼業にも出られず、僅かばかりの荷物など始末いたし、お若と駈落をする支度をいたして居ります。元より所持品がたんとあるでなし、柳行李一個が身上でげすが、木賃宿などへ手荷物でも持つて参るは上々のお客様で、上州屋でも伊之助を大事にして居りましたが、日の暮たばかりの七時ごろ上州屋の表へ一輛の人力車がつきますと、手拭を姉様かぶりにした美婦人が車を飛び下り、あわてゝ上州屋へはいり、

女「あの此方に伊之助さんと仰しやる方は在つしやいませうね、今もおいでになりませうか」

宿「ハイ、お在になります」

女「あの根岸から尋ねて参つたと、左様お願い申します」

と云うも精一杯で真赤になる初心な様子を見て、上州屋の帳場ではじろくとながめ、急に呼んではくれません。

一寸と往来でゞもそうでございます、若い綺麗な婦人に行会いますと振返りたくなるが殿方の癖で、殊に麝香の匂いがプーンと致しては我慢が出来にくいものだそうで、ナニ己は婦人などに眼はくれぬ、渠は魔である化物であるなんかと力んでいらッしやる方もあります、その遊ばすことを窃と伺つて見ますると矢ッ張り人情と申すものは変りません、横丁を曲るときに同伴に気の付かないように横目でな、コウいう塩梅しきにじろりとお遣り遊ばしますから、さて不思議に出来あがつてるもので、まア近い譬えが女嫌いと名をとつてお在遊ばす方が、私の参るお屋敷うちにございます、御婦人のお話や少し下がかったお話になるとフイと其の方のお姿が消えて仕舞うくらいでげすがね、余り大きな声では申されませんが、それでね、若い御新造をお貰いあそばし、年子をつゞけさまにお産し遊ばすから、私もある時御機嫌うかゞいに出て、旦那様は予て御婦人ぎらいと承わり、女は悪魔だと仰しやつていらッしやるそうですが、お子様は最うお三方おありなさいませぬ、と入らざるおせつかいを申しますと、澄したもんで、ナニサ乃公は大の女嫌いだよ、併し鼻アは別ものなんで、何うも恐れ入った御挨拶で、開いた口がふさがらなかつたことがございませぬ、ハ、ハ、ハ、まア斯うしたもんでげすから、若い美しい御婦人を見て怒る方はありますまい。上州屋の帳場でも器量の良いお若さんが伊之助を尋ねて参ったんですから、

すこし岡焼の気味でな、番州はじめ見惚れております。伊之助はお若が尋ねて来ような
んかとは夢にも存じませんけれど、虫が知らしたのかツカくと店の方へ参りますと、お
若が店さきに立つておりますから驚きましたね、思わず知らず声をかけ、

伊「オやお若さんじゃアないかい、何うして出て来なすつた、まア此方へお這入りなさ
い」

若「はい、参つてようございますかね」

伊「いゝ所ですか、誰も心配しなざるものは居やアしません」

と自身で座敷へ連れてまいりましたが、今夜駈落をしようとする約束がしてあるんだから、
態々斯うして来るには何か訳のあることであろう、今朝勝五郎に見付けられた一件もあ
るから、こりや晩まで待つていられない事が出来たのだな、と察しましたので、

伊「何うして来なすつたのだ、そして大層そわくくしていなざるようだが、若しや今朝
のことから」

と心配らしくお若の顔をのぞきこみます。左様なるとお若の方からもジツと伊之助の
顔を見詰めまして、ホツと溜息をつき、グツと唾を呑こみまして、

若「ほんとに大変な事になつたの、それだけれど一心でヤツと此処まで逃げて来たんだ

から、直ぐこれから約束どおり連れて逃げておくれ、若しぐずぐずして見付けられた日にやア最^もう今度こそ何うすることも出来なくなるよ」

伊「エ、大変なことツて」

と段々きゝますると、朝伊之助に別れたのちの事柄を話す。やアそれはとんでもない、そんなことなら一刻でも斯うしてはられないと云つて、伊之助も慌^{あわ}てまどいまして、元より荷物といつてはないが、行李の始末なんかは昼間のうちにしてありますから、それではと申して、伊之助は上州屋方を引はらい、お若と二人立^{たち}出^いで、車に乗つて新橋^{ステーション}停車場へ着きました。調子のわるい時は悪いもので車が停車場に着くと、直ぐ入口の戸はぼつたり閉められ、急ぎますものですからと外から喚^{わめ}きましてもなか／＼戸はあけてくれません。そのうち汽笛の声勇ましく八時二十分の汽車は発車しましたから、お若も伊之助も落^が胆^{っかり}いたし、あゝ馬鹿々々しい、ちよいと開けてくれさえすればあの汽車で神奈川まで一^{ひと}飛^{とび}に往^ゆかれるもの、何^{なん}ほ規則があるからツて余^あり酷^{ひど}い仕方、場内取締の顔を見るも腹^{はら}がたつて堪らない、そうかと云つて打^ぶ付^つけて愚痴^{ぐち}をこぼすことも出来ないの、抛^よろなく次の横^よ濱^ば行^ゆき九時十分まで待たねばなりません、待つているのは仕方がないとしても、若しも其^この中^ちに追^お手^てが掛^かり、引^ひ戻^もされはしまいかとそれのみが心配で、巡^こ査^さが此^こ方^ちの方^{かた}へコツリ

くくと来るを見ては、兩人の様子を怪しく思つて尋ねるのではないか、ひよつとお若の頭に気が注いでそれから駈落の露頭ではないか、とビクビクして彼方へ避け此方へ除け、人のなかを潜りあるいても猶氣が咎めるは、此処に集まつてまいる人々でございます。知り人でもあつて認められては大変とおもえば思うほどに、摺合う人々がじろくと見るような気がいたして、何うも一時間をこゝに待つていることが出来ない。すると八時五十五分に赤羽行きの汽車が発車します報鈴がありますから、

伊「最う十五分経てば横浜ゆきは出ますが、斯うしているうちにね、ひよつと、鳶頭でも追かけて来ては仕様がないから、私はこの汽車で品川まで行こうかと思ふんだが」

若「あゝ、それがいゝよ、こんなにごたくしては何処に知つたものがないとも限らないから、東京の土地をはやく離れてしまふがいゝわ」

伊「品川だつて矢ツ張東京に違ひはないが、こゝほどごたくは仕ないから、直ぐ乗るかえるんで、厄介は厄介だがね、どうもその方が安心の氣がするから左様しようよ」

若「また間に合ないといけないから」

伊「ナニ大丈夫だよ、今度はそんなハマは組みませんからね」

と伊之助は札売場に至り、下等二枚を買つて参り、お若とゝもに汽車に乗込みましたか

ら、ヤツと胸をなで下して人心の付いた気がいたしました。新橋から品川と申せばホンの一丁場煙草一服の処で、巻まきた 苳たばこ 蔑めしあがって在いらつしやるお方は一本を吸いきらぬ間に、品川々と馱夫の声をきくぐらいでげすから、一瞬間に汽車は着きましたが、丁度伊之助お若が今下車しようと致しますると、火事よ〜という声がいたす、停車場ステーションに待まち合あすものは上を下へと混雑して、まるで芋の子を洗うような大騒ぎでげす。その上品川へ下りるものは吾勝に急ぎまするので、お若と伊之助は到頭はぐれて仕舞いましたんで、お互に氣を揉んで搜し合いますが、何をいうにもワア〜という人声はげが劇はげしいから、さっぱり分らない。

甲「どこだ〜、火元はどこだ」

乙「歩行かち新宿の裏から出しアがツたんだ、今貸座敷なめを嘗なめてアがるんだ」

丙「そりや大變、阿魔のそこへ行つてやらなけりやアならねえ、ヤ〜イ、ワ〜イ」

丁「馬鹿にしてあがらア、手前てめえたちが火事場稼かせぎをするんだらう、悪く戯ふざけあがツて」

丙「こん 畜ちきしやう 生なに云やアがるんでえ、そういう手前てめえこそ胡散うさんくせえや」

丁「なにを、この盜賊どろぼう」

なんかと騒ぎのなかで喧嘩が始まり、一層にごった返して、子供や老人としよりは踏ふみつぶされ

るやら、突つぎとば飛とさるゝやら、イヤもう大變の騒動でございます。その中でお若さんは彼方あちらへもまれ此方こちらへ押されいたしまして、

若「伊之さんや、伊之助さんや」

と声を噎からして見得も外聞もかまわず呼んでおりますが些ちつとも知れない。此の大騒ぎのうちには横浜ゆきの汽車は通りすぎ、火事も幸いにボヤで済みましたから、四辺あたりも鎮まつてまゐり、漸ようよう停車場内しずかも静になりましたけれども、伊之助は何うしましたか姿が見えませんが、お若さんは、停車場の外へ出たり内へ這入ったりして頻しきりと探していなさるが何うしても居ないので、進退きわまりましたね。今さら帰るには帰られもしないし、また神奈川在とのみにて行先ゆきさきも判然ときいて置かなかつたし、何うして好いかとうろくして居りますと、新橋発十時の汽車はまた汽笛をならして通り越して仕舞う。余り停車場内をうろつくので、駅夫等は訝おかしくおもつて注意する様子は見える。若し巡査にでもこの素振を認められ尋ねられた時には何なんと答えたら宜よかろうか知らん、それに最もう一度あとに発車があるばかりで、あゝ何うしようか、伊之助さんは何処どこへ往ゆきなすつたのか知らん、途中で厭いやになり先刻さつきの騒ぎを幸いに捨られたのじゃアあるまいか、イヤゝあの人はそんな薄情な気はない、矢張り騒ぎに紛れて私を見失い、今でも屹度きつとさがしていなさるだろう、それにしては此処こゝ

らにいなさらねばならぬ筈だに……こりや神奈川まで行って待っていないさるんだろうか、私^{ゆくさき}が行先も知らないことは能く呑込んでいるんだから、まさか自分ばかり先^{さき}へ行くことはあるまい、と心配しぬいておりますが、時計はさつきと廻^もって最^もう十一時に近くなる。今十五分すれば新橋から発車するのだが、この汽車が最終のもので、これに乗らねば翌^{よくあ}朝^さまで待たなくってはならぬ、それも伊之助と一緒に乗^{のり}後^おれるのなら、別段心配する事もございません、品川には宿屋もございませすことのでげすから、泊る分のことゝ安心がしていただけるが、何を云うにもお若さん一人でげすし、それに世間なれてる蓮ツ葉ものとは違^{ちが}つて、なか／＼宿屋なんかへ泊ることは出来ませんでげすから、その心配というものは一通りじゃアないので、何うして宜^もいか最^もううろつく勇氣もございませんで、腰掛の隅にジツとして溜息をつきまして、あゝ斯ういう苦勞をするも伯父^{おぢ}さんの眼を掠^{かす}め、道ならぬ道に踏み迷^まつて我儘をした罰^{ばち}かも知れない、といよ／＼心細くなりますと、我知らず悲しくなつて参り、涙がはら／＼とこぼれて来ます。そうこう致^{いた}すうちに切符を売出すので、お若さんは最^もうぐず／＼して居られませせん、寧^{いっ}そ神奈川とやらまで行って、何うしてなりと宿屋へ泊ろうと決心されましたは、実に大奮発^{おほいせ}なんで、世間知らずのお娘子でこの決心をするというは怖いものでげす、誰が申し始めましたか存^{ぞん}じませぬが曲者とは能く名付

けました。怖しいは恋で、世の中に何が怖しいッてこれほど怖ないものはございません。

神奈川まで参つて伊之助を待とうと決心を致されましたお若さんは、切符売場へ参り神奈川一枚と買つておりますと、悄悄として遣つて参つた男がある、目早くも認めましたから、身を交そうと致しましたが其の間がございませんで、

男「オやお嬢さんじゃげえせんかえ、まア今時分、何処へ行らしたんでげすえ」

若「なにね一寸そこまで」

と然り気なく答えはいたしますものゝ、その慌てゝ居ります様子は直ぐ知れます、そわくと致して些とも落著いては居ません。

男「えお嬢さん、お見かけ申せば何うも尋常ならぬ御様子でげすが、何処へいらしたのでげす、今お帰りになるんでげすかえ」

若「あゝ今帰るんですよ」

と申しますが神奈川行き切符を買いましたから、件の男はますます不審になりますものですから、

男「お嬢さん只お一人で神奈川へ行つしやるんでげすね、何うも変で、お嬢さん悪いことは申しません、私と一緒に帰らなせえまし、お供いたします、何んなお急ぎの御用か

知れませんが、今から彼方へお出でになりますと十二時過でげすよ、そんな夜更に若い貴嬢さまお一人で、え、お嬢さん、決して悪いことは申しません、仮令改めてお出懸なさるまでもねえ、一旦はお帰りなせえ、翌朝になりやア行らッしやる先方まで屹度私がお供いたしますから」

若「あゝうるさいねえ、急用があつて行くんだから、うっちゃツといっておくれよ」

男「へへ、急御用てえのは、大方、ねえ、お嬢さん、神奈川あたりに待つてるものがあるんでしよう、へへ、何サうるさがられたツて、フ、ム私がお出先きまでお供しましょうよ、根岸の伯父御に頼まれて来たんだから、見届けなきやア役目がすまねえのさ」

とぐるりと変る調子にお若さんは恟りいたし、何うか混雑に紛れてその男をまこうと苦しみますが、生憎夜は更けて居ます事で、待合室にもちらりほらりの人でげす。汽車へ乗込むところにも七八人のものしかない。お若が如何に逃げてまわりましても、怪しい男は始終影身にそつて附いております。先方へ行き着いてからの心配よりは、只今では此の男をまくことに気を揉んでもなかく思ふように参らない。

品川の停車場でお若が怪しい様子に付けこんで目を放さない気味のわるい男は、下谷

坂本あたりを彷徨うろついております勘太かんたという奴。元は大工でげしたが身持が悪いので、親方にもはなれ、仕事をさせてくれるものもない、そうなつて参ると猶更なまけに怠なまけるようになって世の中の稼なりわいいで暮すと申す活業なりわいに逆らつてゆくもので、到頭破落戸ごろうつき仲間へおち、良くない悪法ばかりやつております。根が胆きもツ玉たまの太ふてえ奴やつでげすから、追々その道の水に染まるにつれまして度胸がすわり、仲間うちでは相応に顔が売れてまいる、坂本の勘太かんたてえば、あの墨すみ染ぞめ勘太かんたかと申すぐらいで。この野郎が墨染すみぞめという抹まつ香かうくさい異い名みやうをとつた訳を申し上げないとお分りになりますまいが、何も深い理窟りくつのあるものではございませぬ、異名あだなだの緯名あだなだのと申すものは御存じの通り、その者の身体のうちか、あるいはまた言行のうちに一ヶ所の目安になるものがあつて呼ばれるんでげす。勘太かんたつてえ奴やつも矢張りやつぱそうなんで、脊中に墨染すみぞめの文身ほりものをしているからでございませぬ。申すまでもないことでげすが墨染すみぞめとはお芝居しばいなんぞの中幕なかつまくらによく演やるあの関せきの扉とでげすな、大伴おおともの黒主くろぬしが小町桜こまちざくらの精せいに苦しめらるゝ花やかな幕まくらで、お芝居しばいには至極結構なもので、何時いつみても見飽みのしないもの。此奴こやつが何うしてお若わかしさんを知つておりますかと申しますと、元大工でげすから晋齋しんさいのあてとこへ度々たびく親方おやぢと共に仕事にまいり、お若わかしさんが居いなされたを垣間かきま見たんで、その婢あて娟かな姿かたちに見とれ茫然ぼんやりいたして親方おやぢに小言こごをいわれていた。お顔を拝あがみまするたんびに

ぶるツぶるツと身ぶるいをして魂を失つて仕舞いました。元より惚れぬいてはいるが、流石親方のお出入先ではあるし、自分がたゞき大工であるから、とても遂げらるゝ恋でない
と諦めても煩惱はますゝ乱れてまいり、えゝという自暴のやん八と二人づれで、吉原へ繰込みましては川岸遊びにヤツと熱を冷しておりました。そのうち親方もしくじり、破落戸となつたから、根岸の寮へ参るどころか足ぶみもならない。もう斯うなつては手蔓が切れて顔を拝むことも出来ませんので、抛るなく諦めて仕舞いました。ですが何うも未練は残つてゐる。時ともすると根岸のお嬢さんのことを思い出し、齒軋りいたして悔んでおりました。今夜も懶けものの癖として品川へ素見にまいり、元より恵比寿講をいたす
気で某楼へ登りましたは宵の口、散々ツ腹遊んでグツスリ遣るとあの火事騒ぎ、宿中
は鼎の沸くような塩梅しき、なかゝお客様に構つていられない。上を下へと非常に混雑
いたしますから、勘太はこれ幸いと戸外へ飛びだし、毎晩女郎屋近所に火事があればいゝ、
無銭遊びが出来るなんかと途方もない事を申します。そう火事が矢鱈無性にあつて堪る
もんでございますか。さて品川停車場より新橋へ帰るつもりで参つて見ると、パツタリ
逢つたはお若さんでげす。最初は只だよく面影の似た女としげゝ見惚れ、段々と傍へ
寄つて参つて見れば姿こそ變つておりますが、身顛いの出るほどに惚れた根岸のお嬢さん

でげすから、勘太も驚きましたね、マサカス様こんなとところで出会うとは夢にも思わないから、
 只一人ではあるまい、誰か同伴つれがあらうと注意をしても同伴はない、ハテ変なこともある
 わ、お嬢さんが一人で此の辺あたりにいなさるは読めねえ訳と、ジツと目を止めて視みれば其の様
 子のおかしいので、悪党だけに早くも駈落と覚さとりましたから、しめたく、うまく欺だましこ
 んで連れこみせえすりやア、否いやおう応いわざず靡なびかせる工夫はあるぞ、今夜は弁天様から女に
よやく福を授けられているそうだ、今の騒さわぎで無た銭遊どびをした上、茫ぼん然やり帰けえろうとすると此様こんな
 上首尾、と喜びまして種いろく々お若さんに取り入ろうとするが受付けません。この上は脅して
 連れて行くゆに如しかずと頷うなずき、伯父さんの晋齋しんさいを笠かさに着て引立てようとはいたすもの、何なん
 ぼ悪者でも己おのれの惚おぼれている婦人おんなを手荒く扱あいかねますので、流石さすがに手を取って引張ること
 もしない、顔は知っているが名も知らない気味の悪い男おとこが附つきま纏つわりますので、お若さん
 は心配でならない。何うにかして巻まいて仕舞しまおうといろくに遣やつて見みますが、何うも
 自由まにならぬうちに、新橋発の汽車は品川へ着き、ぞろろと下車するもの乗車するもの
 でごたくごたくしている。こんなときに撒まかないととても紛まれることは出来ぬと、態わざとごた／＼
 致いたす人中にちゆうを選よつて漸ようう汽車きこに乗りこみます。やがてピーと響く汽笛が深夜でげすから物
 凄せついように鳴渡り、ゴツト／＼という音が仕出して動き出しましたから、まア宜よろかった、

まさか神奈川まで尾ついては来こまいと、胸なででおろしますものゝ、若もしやと思つて室内を伺います。気味の悪い男の影は見えないから、此こゝ処ゝに一安ひとあん心しんは致いたしましたが、そうなる直ぐ心配になつて参るは神奈川へ着いてから何うしたら宜いかろうか、好塩梅いに伊之さんが待つてゝくれゝば可よいが、若しも居いなかつたら何うしよう、宿屋へ泊るにしても一人、それに女らしく髪かみでも結むすつてゐることか、手拭てぬぐをとつたらいが栗坊主あか、さぞ訝おしく思おもうだろう、こんなことゝ知しつたら鬢かづらでも買かつてかぶつたものを、まアこれでは仕し様やうがない。と流なが石いしに一人歩あきしたことの無いお若わかが思おもいに沈しづんで心細こころこまく、ほろりゝと遣やつて居ゐりましたが、汽車は間もなく神奈川へ着つきましたので、恸びつくりして下車げいたしたが、心当こころあたりにして来た伊之助の姿は認しめることが出来でません。停ステーション車場ジョンの中でうろゝしておおります。何方どつちへ出たら宿屋があるかそれさえ分わらないので、人ひとに聞きこうかと幾いくた度たびか傍かたわへ寄よつても何うも聞きくことが出来でず、おいゝ人は散ちり汽車の横よこ浜はまさして行いく音ねも幽かすかになつたから、思おもい切きつて停車場外がいへ出いでますと、

勘「オイお嬢ぢやうさん、其そこ処ゝにいなさつたか、篋べらぼう棒ぼうに探たがさせなせえした」

と声こゑかけられて又恸ありいたし、もう仕方しがない、逃にげ出でして何ど処この家うちへでも飛とんで助すけけて貰もらおうと決け心こゝろはしました。何なんにしても夜よが更あけてゐるんだから閉しめてる家い家やばかり、仕

方がないと駈け出しますると、勘太は忽ち追いすがり、緊り袂を押えて、

勘「何だなんな、逃げようツて逃げられるものか、アハ、ハ、ハ、ハ、」

杖とも柱ともたのむ男にはぐれましたお若さん、気も逆上のぼせてうろくして居ります処を勘太につけられ、ヤツと虎口ここうをのがれたと思つてるに停車場ステーションへつくど直ぐ、こゝまでも執念ぶかく尾つけて参り、逃げようと云つたツて逃さぬやらぬと、袂をおさえられましたんで、モウ絶体絶命の場合でげすから、アレーという声をたて、猶逃げられるだけほど、掴まりました袂をはらつて駈出します。人間が一生懸命になるといは怖しいもので、重いもの一つ持つたことのないお若、もとより力量ちからのあろう筈はございませんが、恐いと申す一心でドーンと突いた力は凄すさまじい、勘太は、

勘「アいた、ハ、ハ、ハ、」

と云つて肋ひばらをかゝえ、ドツサリ倒れました。お若はそんなことには眼はとまりません、夢中でかけ出して一町ほども逃げ、思わず往来の人に突当りましたが、精根せいこんがつかれて居るから堪らない、今度はぼつたり自分が倒れた。驚きましたは突当られたもので、

○「エ、なんだ、慌てるにも程があるもんでございますよ、私わしへぶつつかつて、ハア、提ち灯ようちんもなにも消されて仕舞つた」

と眩きながら夜道を歩く人だけに用意はよく、袂をさぐりましてマツチを取り出し、再び提灯を点して四辺を透し見ますれば、若い婦人が倒れているので恠りいたし、さては今突当つたはこの女か、よくよく急ぐことがあつて気が急いでいなされたのであろう、可愛そうにと側によつて介抱するが、氣絶しているからいよく驚きまして、持合す薬を与えなどいたすうち、ようやく蘇生しました。

○「ヤレ、お女中さんお氣がつかしましたか、まア可かつた」

若「はい、誰方が存じませぬが、有難うございます」

○「ハ、ア氣をしつかりさつしやりまし、見ればこゝらあたりのお方じやございませぬえ御様子、何処のお方でござえますえ」

若「はい、東京のものですが、訳あつて此の神奈川へ参る途、品川の停車場で同伴にはぐれ難儀をしているところへ、悪者に尾けられまして此処までも跡を追つて来て」

○「エ、悪者に尾けられなせえましたと、それはさぞまア御難儀でございましたらう」

と親切に介抱して、段々と素性から何用あつて深夜に神奈川へ来たと尋ねてくれるは、もう六十有余にもなる質朴の田舎爺でげすから、まさか悪氣のあるものとも思われぬので、お若さんも少しは心が落著き、明白に駈落のここそ申しませぬが、同伴というは男

で斯う斯うしたものと概略あらましを語ります。田舎爺も気の毒がりて猶その男の名前まで、根ほり葉ほり尋ねるので今更隠しにくくなりまして、伊之助のことを明かす。そうすると爺は恟りして、口のうちに伊之助くと二三遍お題目でも唱えるように云っていたが、何か首肯うなずきまして、

爺「伊之助という男は何うやら私が知つてるものらしい、それと一緒に此処こゝへ御座るといふは、こりや私の家とこへござらツしやる客衆かも知れねえ、まア兎も角くも私のとこへ来きさせえまし」

と云われて地獄で仏に逢つた気のお若さん、ホツと息をついて、それでは何分ともにと言つている後うしろに、一突き不意を喰くらつて倒れた悪者の勘太、我と気がついてまだ遠くは往ゆくまい、折角見かけた仕事も玉を逃にがしちやア虻あぶら蜂はちとらずで汽車賃の出どこがないと、己おのが勝手に尾ついて来ていながら直ぐ懐のグレ蛤はまを勘定いたし、おっ掛けてまいツたが、今度はお若一人でない、老爺おやじが側そばにいるのでうつかり手出しがならず、様子をうかゞつておるうちに、何うやらお若を老爺おやじが連れて行きゆきそうだから、ドッコイ左様そやううまく、仕事の横取はさせねえと、己おのが心にくらべて、

勘「この阿魔あま太たえあまだ、大金を出して抱えて来たものを途中から逃げさせてお堪たまり小

法師があるものか、オイ爺さん、此奴のいう事ア皆な嘘だ、お前を詐すんだぜ、ハ、ハ、ハ、

と己が非を飾ってお若を連れ行こうとするので、田舎爺は呆れましたが、男のこえが耳なれておりますから提灯をさしつけ、顔をのぞいて見ると聞覚えのある声こそ道理で、老爺が一人息子の碌でなし、到頭村内にもいられず今は音信不通になっている勘太でげす。田舎爺は老の一徹にカツと怒り、

爺「わりやア勘太だな、まだ身持が直らず他人様に御迷惑をかけアがるか、お女中さん何も怖ねえことアごぜいましねえ、この悪たれは私が餓鬼」

といううちに早や言葉が潤んで参ります。親子の情としては然もあるべきことでございましょう、我子が斯様碌でもないことを致し、他人を悩めると思いましたら堪りますまい。爺「さア、これからは己が相手になる、この甚兵衛が相手じゃ」

と敦圀きまするので、流石の勘太も親という一字には閉口致しましたか、這々の体で逃げて仕舞います。そこで甚兵衛爺さんお若さんを我家へ連れて戻り、婆アどんにも一伍一什を斯々と語り、今夜は遅いからまアお休みなさい、明日にもなれば伊之助を尋ねて参りますからと親切にいたしてくれまます。さて、伊之助でございませうが、品川の火

事騒ぎでお若にはぐれ、いろ／＼と尋ねましたが薩張り知れない。そのうち最終列車はシ
 ユーコト／＼と出て仕舞い、只だ心配に心配をしぬいている。翌朝よくあさになって再び停車
 場ヨシに参り探しましたが知れないので、駅夫などに聞合きあわすと、昨夜の仕舞い列車に乗り
 こんだらしいので、自分も兎に角神奈川へ参つて探そうと汽車に乗り、停車場に着いて聞
 合して見れど、何をいうにも夜更よふけのことで雲を捉つかむような探しもの、是非なく甚兵衛の家
 へ尋ねて参り、お若さんと再会くだりの条に相成るのでございます。

六

伊之助の神奈川停車場ステーションへ着きましたは、お若さんが此処こゝにまいって甚兵衛爺さんに助
 けられた翌朝よくあさのことでございますから、なか／＼お若の行方を探ることが出来ない、左
 様かと申して再び東京へ帰りましたところで、これとても何う探したら分ろうという目的めあて
 が付きませんので、あゝ困つたな、己もこまるがお若さんは嘸難儀さぞをしていなさるだろう、
 あゝいう方だから一人歩きしたこともないに、方角も知れぬ土地に来てどんなに困るか知
 れたもんじゃアないから、それにしても不思議だ、何うしてまア神奈川まで一人来なすつ

たろうか知らん、大方己が前の汽車で来ていると思ひこんでゝあるうが、あゝ困るな、可愛そうでならないことをした、こんな事なら品川まで出掛けずに、新橋から一緒に乗るだつたにと、いろ／＼と悔んでおりましたが、今更何なんといつても仕方がない、一旦甚兵衛爺さんのところへ落著おちついて探したら分らぬこともあるまい、お若さんの方でも屹度きつといろ／＼に探していなさるに違ひないから、と伊之助はよう／＼決心いたしましたから、久々で甚兵衛のところへ尋ねてまいる。村の入口には眼になれた田舎酒屋の看板と申すも訝おかししいが、兎に角酒屋の目印となつております杉の葉を丸く束ねたのが出ています。皆様がお名前だけはお馴染になつていらつしやると申しますと、私わたくしどもは近接じきくにお馴染かと仰やる方もございましょうが、明治の御代に生きているものがなか／＼思いもよらぬことで、今を距さること四百十八年も前で後土御門帝ごつちみかどの御代しろしめすころ、足利七代の將軍義尚よしひさの時まで世を茶にしてお在いでなされた一休が、杉葉たてたる又また六の門かどと仰せられたも酒屋で、杉の葉を丸めて出してある看板だそうにございます。そうして見ると此の目印は余ほど古くからあるものと見えます。さて序ついででございすから一寸申しておきますが、一休様は応おうえい永元年のお生れで、文明ぶんめい十三年の御入寂ごにゅうじやくでいらせられますから、浮世にお在遊たしえばしたことは丁度八十八年で、これほど悟りをお開きなされたお方は先ずない。仮令たとえござ

いましたとて俗人が存じておりますは、此の坊さん程お近ちかづき附はありませんでげす。その酒屋の隣が甚兵衛の家でございますから、伊之助はズン／＼這入つてまいる。スルと奥の方で若い女の声がして甚兵衛爺さんも婆さんも頻しきりに慰さめている様子。ハテ悪いところへ来たわい、誰か客があるのか知らんと思いましたが、引返ひっかえして出て行くも変ですから、伊「爺やさん、お達者でございますか」

と声をかけますと、甚兵衛は、

爺「婆さんや誰か来たようだぜ、ちよつくら見て来さつしやい」

というので婆さんは入り口へ出てまいると、伊之助が立つて居りますから恟びつくりいたし、挨拶もいたさずに、

婆「やア、来さしツたく、お若さん、伊之助さんが来さツした」

と喜ぶので伊之助もおどろきましたね、婆さんがお若さんと呼びますからは、確たしかにお若が此処こゝに来てにちがいない、と不思議で堪りません。お若は老人夫婦と何うか伊之助を探す手だてをと相談しているところではげすから、飛立つ思いで出てまいり、此処でお互いに無事の顔見て安心いたし、それから甚兵衛の厄介になつて暫らく居ますうちに、お若さんのお腹なかは段々と脹ふくれて来るので、遠走りもすることが出来ぬところから、遊んでもい

られません。と云つて外ほかに何もすることがない。田舎ではございますが追々開ひらけてまいり、三味線などをポツリ／＼と咬かじる生意気も出来て来たは丁度幸いと、伊之助は師匠をはじめ、お若は賃仕事などいたし、細々ながら暮している。そのうちにお若は安産いたし、母子おやことも肥立ひだちよく、甚兵衛夫婦は相変らず親切に世話してくれます。お若伊之助は夫婦になつて田舎で安樂に暮して居ります。生れた子供も男で伊之助のいの字とお若のわの字を取つて岩次いわじと名をつけ、虫気むしけもなくておい／＼成長してまいるが、子供ながら誠に孝心が深いので夫婦も大層喜んでいました。これより暫らくは夫婦の上には何事のおはなしもございませんが、末になると全く離魂病の骨子こっしをあらわし、また因果塚のよつて起おこること、相成るのでございます。こゝに品川の貸座敷に和国楼わこくろうと申すのがございまして大層流行はやります。娼妓も二十人足らず居り、みんな玉が揃つて居るので、玉和国と、悪口をいう素見ひやかしまでが誉ほめそやしているぐらいでげす。今日は暇だと申しても一人で二人ぐらいのお客は屹度きつとある。忙しいと来たら五六人ずつはありますからなか／＼廻しが取れません。甚助じんすけをおこす客もあるが怒おこつて出て行くものゝないも訝おかしい。それで安直店みせと来ていますから滅め々な流行りかた、この楼うちに小主水こもんどと呼ばれて全盛な娼妓がある、生れはなんでも京阪地方だと申すことで、お客を大切だいじにするが一つの呼よびものになつています。この小主水の部屋か

ら妹分で此のごろ突出された一人の娼妓は、これも大阪もので大家の娘でございましたが、家の没落に身を苦界に沈め、夜ごとに変わる仇枕、朝に源兵衛をおくり、夕に平公をむかえております。この者の名を花里といい頗る美人でげすから、忽ちのうちに評判になり、

○「コウ熊ア、玉和国の花里てえのはすばらしいもんだとよ」

△「ウム左様よ、土地第一の別嬪だとよ」

○「手前おがんだか」

△「己らア、仕事を仕舞うと直ぐこれで三晩おがみに来るが、彼奴流行妓だからなア、まだお目にぶら下らねえのさ、今夜ア助見世に出アがるところでもと先刻から五度まわったが、よくく御縁がねえのだ、明日の晩は半纏を打殺しても登楼らねえじゃア気がすまねえや」

○「素敵に逆上ていアがるわ、顔も見ねえ女に夢中になる奴もねえぜ」

△「馬鹿奴、美人に極つてらア」

なんかと騒ぐものもあるほどでげすから、其の全盛は思いやられます。軍艦が碇泊すると品川の宿は豊年でございます。皆様御存知のとおり海上にあつて毎日事務をとつてお

在いでなさるお方々でげすから、何いすれの港になりと船が泊りますることになると、それ／＼
にお暇が出て日頃の骨休みをなさる。成程そうでございましょう。軍人方でいらせられま
すから、いざ戦争という場合になりましたは申すまでもないことで、甲板かばねに屍かばねをさらすと
も一歩もお引き遊ばすなどという卑怯未練な方はございませぬ。陸軍たりとて海軍たりと
て勇武の御気象には少しの変わりもない、日本固有の大和魂というものがお手伝をいたしま
すからでもございましょうが、我わがくに邦軍人がたの御気象には歐洲各国でも舌まを巻まておるそ
うで、これは我が某ある将官の方に箱根でお目通りをいたしたとき直接じきくに伺つたところでご
ざいます。これはお話が余事に外それ恐れ入りましたが、左様な御気象をお持ち遊ばす方々
で在いらせられますから、ナニ暴風怒濤どとうなんぞにビクとも為さる気遣いはない、併しかし永暴風雨
をくつては随分御困難なもんだそうで、却かえつて戦争をしている方が楽だと仰せられた軍人
もございました。そういう御難儀を遊ばしていらつしやるんでげすから、港々にお着遊つきば
したときは些ちつとは浩こうぜん然ぜんの気もお養いなさらずばお身体が続きますまい。それでげすから
軍艦が碇泊したというと品川はグツと景氣づいてまいる。殊に貸座敷などは一番にぎわに賑しく
なるんで、随分大したお金が落るそうにございます。娼妓のうちで身請の多くあるは品川
だと申しますも、畢ひつきょう竟よう軍艦の旦那に馴染を重ねるからのことかと存じます。丁度紅も

葉も色づきます秋のことでございますが、軍艦が五艘も碇泊いたし宿は大層な賑いで、夜になると貸座敷近辺は恰で水兵さんで埋るような塩梅、何れも一杯召食していらつしやる、御機嫌だもんですから、若い女子供は怖ながるほどでございます。それでなくつてさえ流り行ります和国楼、こういう時には娼妓達は目もまわるように忙がしい。中々一人々々のお客を座敷へ入れることは出来ません、名代部屋には割床を入れるという騒ぎで、イヤハヤお話になつたものでございせんが、お客様がそれで御承知遊ばして在つしやるも不思議なものでございせん。従つて娼妓達が勤め向きもわるいが、馴染になつて在つしやるお客様は、ア、彼奴も気の毒な、斯う牛や馬を追いまわすようにされちやア身体が続くもんじゃないよ、なんぼ金の為に辛い勤めをするんだつて、楼主があんまり慾張りすぎるからわるい、政府でも些と注意して一夜のお客は二人乃至三人より取らさねえように仕さうなものだ、なんかと御自分の買馴染が一座敷へ三十分と落著いていられないのを可愛そうに思召しもございましょう。例の花里花魁でございせんが、この混雑かえして生中に一層忙がしい、今日で三日三晩うつとりともしないので、只眠いねむいで茫然して生体がない。お客のお座敷へ出ても碌々口もきかないが、さてこれと名ざしてお招き遊ばさるゝお方はそんなことには頓着はなさりません、只花里々と夢中になつていら

ツしやる。いま花魁の出ているは矢ツ張り軍艦のお客で、今夜は二回をかえしにお出でなされたんでげすから、疎末にはしない、頻りに一昨夜の不勤を詫していると、新造が廊下から、

新「花里の花魁え、一寸とおかおを」

花「あゝ今行くよ、ほんとにうるさいことねえ」

客「情人が逢いにきたとよ、早くいつて顔を見せてやるが好いわ、おう花魁、ハ、ハ、ハ、ハ、」

花「御冗談ものですよ、私のようなものに情人なんかあるもんですか、ほんとにモウつく／＼厭になつた」

新「花魁、花魁え、お手間はとらせませんから」

花「あいよ、今参りますよ」

と客に会釈して立てば新造は耳に口よせ、

新「お初会の名指です」

花「そう、何様人だえ、こないだのような書生ッぽだと御免蒙るわえ」

新「ナニ美男さ、風俗は職人衆ですがね、なんでも親方株の息子さんてえ様子ですわ」

と新造に伴なわれまして引附ひきつけへまいりますと、三人連の職人衆しゅうでございしますが、中央なかに坐っているのが花里を名ざして登楼あがつたんで、外はみなお供、何うやら脊負おんぶで遊ぼうという連中、花里花魁自分を名指してくれたお客を見ますと、成程新造の申しました通り美男子いとおとこで、尋常たゞのへっぽこ職人じゃアないらしく思われます。あゝ好いたらしい若い衆しゅうだと思つて見ぬ振をしてじろり／＼顔を見るもので、男の方では元より名指して登楼あがるくらいでげすもの、疾とつくに首ツたけとなつて居おるんでございます。臆やがてお引けということに成つても元より座敷は塞ふさがつて居りますから、名代部屋へ入れられ、同伴つれもそれ／＼収まりがつきました。

花「一寸ちよいとお前さん、御免なさいよ、直ぐ来ますからね鼠にひかれちゃアいけませんよ、ホゝゝゝゝ」

客「全盛な花魁だから仕方がねえや、まア寛ゆっくり行つていらつしやい、屹度留守はしていらアな」

花「まことに濟まない事ねえ、何うか堪忍して頂戴よ、生憎あいにくお客が立たてこんでるもんだから、寝て仕舞つてはいやだよ」

客「ハイ／＼、天井の節穴でも数えているからいゝてえば」

花「いま新造衆しゆに小説本でも持もせてよこすからね、屹度寝てしまッちや厭よ」

嬌然にっかりいたして吸付煙草すいつけ一服を機会しおに花魁は座敷を出てまいります。若い職人風の美男子うおとこも、花里の全盛なのは聞きつたえておりますし、殊に初会のことではげすから、左様打ちとけて話をすることもない。今夜はこれきり寝転ねこかしかとは思つていますが、同伴つれのの手前もあることで、帰るとも申し悪いにくいのもじくいたしている。寝ようと思つても引切ひっきりなしに廊下にひゞきます草履の音が耳につき、何うしても寝られるものでありません。すると座敷の障子がスーとあきますから、さて来たなと思ひますと左様そでない、有明の油をさしに来たのですから、えッ畜ちきしやう生だまされたかと腹は立ちますが、まさかに甚助らしいことも云われないので、寝たふりで瞞ごまかしている。いよく今夜は寝転ねこかしに極つた、あゝ斯様こんなことなら器用に宵の口に帰つた方がよかつたものと、眼ばかりぱちくりくいたして歎息たんそくいたしています。花里の方でも初会ながら憎からず存じまする客でげすから、早く廻ろうとは思つてますけれど、何を申すも大勢な廻しのあることで、自儘じまに好いた客の傍そばへばかり行つてゐることは出来ませんもんですから、漸ようよう夜明になつてこの座敷へまゐりますると、うとくくしています様子。

花「何うも済まなかつたこと、堪忍して下さいよ、あら厭だ、狸なんかを極めてさ、く

すぐるよ」

と脇の下へ手を差し入れて、こちよ〜〜。

客「フ、フ、フ、ム、酷いね花魁、あゝあやまつた〜もう、フ、フ、フ、ム、そんなに苛めなくもいゝじやないか、あやまつたツたてえばよ」

と腹這になれば、花里は煙草をつけて煙管を我手で持ったまゝ一吸すわした跡を、その儘自身でいい、嬌然いたし、

花「オ、寒くなつたこと、もう浴衣じやア、明方なんか寒くて仕様がないわ」

この職人体の美男子は何物でございましょうか、花魁も初会惚でもしているらしく思われます。さて職人体の好男子でございしますが、あれは例のお若さんが根岸の寮で生みました双児、仕事師の勝五郎が世話で深川の木工の棟梁へ貰われてまいつた伊之吉でございます。光陰は矢の如く去つて帰らずとやら申しまして、月日の経ちますのは実に早いもので、殊に我々仲間申しあげのお噺の年月、口唇がべろ〜と動き、上腮と下腮が打付かります中に二十年は直ぐ、三十年は一口に飛ぶというような訳、考えてみますれば呑気至極でげすがな、お聞遊ばす方でもそれで御承知下されて、お喋りする方でも詰らないところは端折つて飛して仕舞うと申す次第で。大芳棟梁のそこへ貰われてまいつた伊

之吉、夫婦が大層可愛がつて育て、おいくと職を仕込みますが、まこと実に器用な質たちで仕事も出来て来る。多くある弟子達にも気うけは至極よろしく、若棟梁くと立てられて、親の光りいすで何れへまいりましても引けは取らない。職の道にかけても年が若いから巧者こそありませんが、一通りの事は何をもつて行つても人に指図さしずがしていられる。それですからますく、評判はいく。大芳の若棟梁は今に立派なものになんさる、親方さんも好い養子をもらい当て、仕合せだ、あ、甘え塩梅うめしきに行けば実子がなくつても心配しんべいすることはないなどと申して居ります。伊之吉は仲間にも顔が売れてまいれば追々交際つきあいも殖ふえる上、大芳棟梁もとより深川の変人、世間せけんむき向へ顔を出すなどは大嫌いでございますから、養子の伊之吉が人の用いもよく、用も十分に足りていくので、自分が出懸けねばならぬところがあつても、伊之やお前めえ往つて来てくんねえな、と代理をさせるのでますく、交際こうさいはひろくなり、折にはこれから人々と共に遊びゆに行く事もあるが、決して色に溺れるてえ事なんかはありません。左様そう斯ういたしておるうち、品川の噂がちらく、耳に這入り、玉和国楼の花里という花魁の評判が大層もないので、伊之吉も元より血氣の壮わかもの者でございまするし、遊びというものが面白くないとも思つていませんから、ふらり内弟子のものと共に品川へ参り、名指なさしで登楼あがつて見ますと、成程なかくの全盛でげす。それで取まわしがい、誠

に痒いところへ手の届くようにせられましたから、何うも捻りばなしで二度を返さずにおくことが出来なくなる。後朝のわかれにも何となく帰しともない様子があつて、

花「折角斯うして来て下すつたのに生憎立てこんでいてねえ、何うも済まないんです、此の儘帰すもまことに気がかりでならないけれど、無理に引きとめておいては自家の首尾もありましょうし、またね、あの女にも申し訳がありませんから、私は我慢して辛抱しますが、お前さんはこれに懲々してもう二度と再び来ては下さるまいね、ですが可愛そうだと思つたら何うかお顔だけでも」

と言さして後はいわず、嬌然笑いました花里の素振は何うも不思議でございます。伊之吉も何となく別れて帰るが辛くなりましたが、左様かといつて初会で居続けするも余り二本棒と笑わるゝが辛く、また一つには大芳夫婦への手前もありますから、その朝は後がみを引かれる心地いたして、思い切つて支度をするうちに、連のものも、さア帰ろうと促しますので、

伊「花魁、とんだ御厄介になりました、明日の晩あたりまたお邪魔にまいりましょう、来てもいゝでしようかね、ハハハハハ」

花「本当ですか、本当に明日来て下さいますか、屹度ですよ、屹度まっていますからね」

花里に逢つてから伊之吉の様子が何うも変だ、何となくそわ／＼いたして茫然して居ります。お職人衆というものは何事でも綺麗さつぱりいたしたもので、思ったことを腹へ蔵つておくなんかてえことは出来ません。お名にお差合があつたら御免を頂きますが、

八「オイ熊ア、手前大層景気がいゝな、始終出かけるじやアねえか」

熊「フ、ム左様よ、彼女が是ツ非来てくれと吐かしたアがッてよ、己らが面を見せなけりやア店も引くてえんだ、本ものだけ、鯨 鉾 だちしたつて手前達に真似は出来ねえや、へん何んなもんだい」

八「笑かせアがらア、若大将に胡麻すりアがッて脊負のくせに、割前が出ねえと思つて戯けアがると向う臆ぶつ挫かれねえ用心しやアがれ」

熊「へん嫉め、おたんちん、だがな八公、若大将にやア氣持が悪くなるてえことよ、阿魔奴でれ／＼しアがッて、から埒口アねえ」

八「阿魔アツて品川の奴か」

熊「そうよ、玉和国の花里てえ素敵もねえ代物よ、夏の牡丹餅と来ていアがるから小癩に障らア、な一晚行つて見な、若大将の欸待かたてえものはねえぜ、ところだよ、此方の阿魔と来たら三日月様かなんかで、刻菘の三錢がとこ煙よ、今度ア行くにやア二つと

燐寸^{まち}まで買つてかねえじやア追付^{おつ}かねえ、これで割^{わり}前^{めえ}勘定^だった日にやア目も当てられねえてえことよ」

八「風吹^{かぜ}き鳥^つの貧^{びん}つくで女の子に可愛^あがりようとア押^{おし}が強^{つえ}えや、この沢^{たく}庵^{あん}野郎」

熊「こん畜^{ちき}生^{しやう}ツ」

なんかと伊之吉の事から朋^{とも}友^{だち}喧嘩^{けん}が起^{おこ}るといふようなさわぎ。伊之吉も凝^こつて品川通いを始めますと、花里の方でも頻^{しき}りと呼ぶ。呼ばれますから参る。まいりますからますます深くになるといふ次第で、伊之吉が来ると岡焼半分に外の女郎が花里にからかいます。

トントンくと登^あるをすが籬^{がき}のうちから見て、あゝ来て呉れたなど嬉しく飛立つようです。が、他の張^{はり}店^{みせ}している娼妓の手前もありますので、花里は知らぬ顔していても眼の早い朋輩^{とも}が疾^とづくに見附けていますから堪りません。

娼「花里さん来たよ、早く側へ往つておあげよ、そんなにシラを切^きなくツてもいゝわ、モウ気は部屋へ行つてるんだよ、呆れたもんだねえ、花里さんの抜^ぬ殻^{がら}さんや、オイ〜」
左右から突^つついたりなにかいたします。左様^{さやう}されるとされるほど嬉しいもので、つツと起^たちまして襦^し襦^かの褌^{つま}をとるところを、後^{うしろ}から臀^{いし}をたゝきます。

花「あら酷^{ひど}いことよ、宵店からお尻をたゝいてさ」

と持つたる煙管を振り上げます。と元よりたゝかぬとは知っていますが大おおぎよう
なもので、
仰

娼「ア、あやまつたゝ、親切にお咀^{まじない}咒^{まじない}をしてあげて怒られちゃア堪らないねえ、今夜は外にお客がなく伊之さんとねえ」

花「御親切さま、そんなのじやありませんよ」

娼「うそばかり吐^ついてるよ、毎日惚^{のろ}けているくせに今夜に限^りってさ」

花「そんなことア情人^{いろ}のうちさ、女房^{にようぼ}となれば面白^{面白}くなくってよ、心配でならないわ、ホゝゝゝ」

娼「おや、花里さんにも呆^すれツちまアねえ、素惚^{すのろけ}気^けじやア堪^{かん}弁^{べん}が出来ぬからね」

花「ハアいゝとも、何^{なん}でも御馳走するわ」

と双方とも丸でからツきし夢中で居りますると、茲^{こゝ}に一つの難儀^{なんぎ}がおこります条^くは一寸^{ちよつ}と一服^くいたして申し上げましょう。

え、一段々と進んでまいりました離魂病のお嘸はなしで、当席にうかがいまする処は花里が勤めの身をもつて情人伊之吉に情を立てるといふ条くだり。日毎夜毎ひごとよごとに代る枕まくらに仇浪は寄せますが、さて心の底まで許すお客は余あんまりないものだそうでござります。無粋ぶすいな私わたくしどもには些ちつとも分りませんが、或ある大通だいつうのお客様から伺ったところでは浮気稼業をいたして居おる者は却かえつて浮気でないと仰おほしやいます。成程惚れたの腫れたのといやらしき真似をいたすのが商売でげすから、余所目よそめには大層もない浮気ものらしく見えましても、これが日にち々じやくの勤めとなつては大口きいてパツ／＼と致すも稼業に馴れると申すものでござりましょう。其の代り心しん底そこからこの人と見込んで惚おぼれて仕舞うと、なか／＼情合は深い、素人衆の一寸ちよいぼれして水でも指されると移うつり気がするのと訳がちがうそうで、恋の真実まことは苦勞人にあると申してございますのも其処そこ等を研究したものでありましようか。花里花魁は何うした縁でございますか、あの明あけ烏がらすの文句の通り彼かの人に逢うた初手から可愛さが身にしみ／＼と惚れぬいて解けて悔いしき鬢びんの髪などと、申すような逆のぼ上せ方かたでげす。伊之吉とて同じ思いで三日にあげず通つてゐる。すると茲こゝに一つの難儀なんぎが持ちあがりました。と申すは花里を身請しようというお客が付いたんで、全体なら喜んで二つ返事をする筈であるが、そこが何うもそうすることが出来ない。伊之吉という可愛い情人おとしこがあつて、写真まで取かわせ

てある、その写真は延喜棚にかざつて顔を見ていぬときは、何事においても時分時になると屹度蔭膳をすえ、自分の商売繁昌よりは情人の無事息才で災難をのがれますようにと祈つているほどで、泥水から足をあらつて素人になるを些とも嬉しく思いません。身請ばなしが始まりましたから花里は鬱ぎ切つて元気がない、只だ伊之吉が来ると何かひそく話をするばかり、それも廊下の登音にも気をおいて居ます。その身請為ようという客は、欧米を航海して無事に此のごろ帰朝されました、軍艦芳野の乗組員で少しは巾のきくお方、お名前は判然と申し上げるも憚りますから、仮に海上渡と申しあげて置きま

す、此のお方がまだ芳野へお乗こみにならぬ前、磐城と申す軍艦にお在あそばし品川に碇泊なされます折、和国楼で一夜の愉快を尽されましたときに出たのが花里で、品川では軍艦の方が大のお花客でげすから、花里もその頃はまだ出たてゝはごぎいますし、人々から注意をうけて疎かならぬ款待をいたしたので、海上も始終通つて居られましたが、その後芳野へお移りになつて外国航海と相成りしに後髪をひかれる気はいたすものゝ、堂々たる軍人にして一人の為に肘をひかるゝは同僚の手前も面目なしとあつて、綺麗に別盃をお汲みなされ、後朝のおわかれに、

海「それでは僕は今日四時には出帆して洋航するからね、お前も無事で、身体を大

切に稼ぎなさい、これが別れとなるかも知れぬ、併し無事に航海を了つて帰朝するときは、お前も何時までも斯うして勤めさせては置かぬからな、当にはならぬことだがせめては楽しみに待つていてくれ、男子の一言帰朝さえすれば屹度身請してやる」

と言葉残して芳野が吐く一条の黒煙をおき土産に品川を出帆されました。此方の花里でございます。元々好いた男というでもなし、たゞ聞ながしに致して居りましたが、海上の方では一旦約束した言葉、反故にしては男子の一分たゞずと、大きに肩をお入れ遊ばして、芳野艦が恙なく帰朝し、先ず横須賀湾に碇泊になりますと直ぐ休暇をとつて品川へお繰出しとなり、和国楼へおいでになつて、身請の下談しが始まりましたんで、花里は恟りいたして一度二度は体よく瞞かしておき、斯うなつては最う振つてふつて振りぬいて、先から愛憎をつかさせるより手段はないと、それからというものお座敷へは出るが腹が痛むの頭痛がするのと、我儘ばかり云つても海上は身請まで為しようという熱心でございますから、花里が嫌でふるとは思われませんが、これも我には心易だての我儘と自惚が嵩じていましたから、情人の為に嫌われると気の注きませんで持ったもの。先ず一心に凝つていらつしやる時は誰方でも斯ういう塩梅なものでございましょう。いやがツて居ればその客が余計に来るもので、海上は頻りと登楼いたし、花里には延たたらに昼夜

の揚代ぎよくがついておりますから、座敷へ入れないことは出来ぬ、まるで我わが部屋は貸し切りにしたような始末で、まことに都合がわるい。伊之吉が来ても何時も名代部屋で帰して仕舞わねばならぬ。訳は知っている、無理な事は云わないが、さて心の中うちでは面白くないもので。偶たまには訝おつしやくに癩しかくることがあるを花里は酷ひどく辛く思つて鬱ふさぐ上にも猶なほふさぐ。左様そうされると元々自分に真実つくしている女の心配するんですから、気の毒になつて機嫌の一つも取つてやるようになる。平常ふだんならそれなりに嬌にっこり然して他愛なくなるんですが、此の頃は優しくされるにつけて一層悲しさが増してまいり、溜息ためいきついて苦勞するのが伊之吉の身にも犇ひしく々と堪こたえます。さア左様なるといよく情は濃くなつて何うにも斯うにも仕ようがない。今夜も伊之吉が来たが、例の通り座敷は塞ふさげられている。尤もつともまだ海上は来ていないが、晩には屹度来るからつて約束して行つたから座敷は明けておかないじゃアすまぬ。

花「ねえ、伊之さん、私や、何うしたら宜よろかろう、本ほん当とに困まどつちまアわ」

伊「いゝじゃねえか、海上さんてえのは海軍の少尉だつて」

花「まだ少尉にやア成らないのさ、候補生とやらで航海して来たんだから、今度少尉になるんだとさ」

伊「それじゃア少尉もおなじことよ、お前めえも欲ほのねえ女じゃねえか、ハイと云つて請出うけだ

されて見ねえな、立派な奥様と言われてよ、小女ぐれえ使つて楽にしていかれるに」

花「またそんな事を云つて、私に心配させて笑っているのかい、何うしてお前さんは情がないのだろう、私が真身しんみになつて相談すれば茶かして仕舞つて」

伊「十二茶かすんじやアねえが、其の方がお前の為ゆえだろうと思つてよ」

花「なんかというと為ためだくと瞞ごまかして、お前さんが女房にしてやると云つたのは、あ
りや私をだましたんだね、もういゝわ、そんな水臭い」

とツンと致しますが、眼には早や涙ぐんで居りますから、伊之吉も黙つてはいられない。

伊「これさ、また怒おこるのか、己おのらが言つたことが気にさわつたら堪忍こんなしなせえ、何も悪
氣でいったことじやアねえんだ、己おのらだつて斯様こんなわけになつてるお前ゆえを海上に渡して仕舞
うのはいゝ心持じやねえが、これも時節だ、仕方がねえというものよ」

花「それじやアお前さんは何うあつても切れるてえのだね」

伊「切れたくアねえが、切角せつかくお前ゆえが身儘になるのを己おのらが為ために身請をうんと云わねえ
じやア、お部屋へ濟まなかうじやねえか己おのらが、お前を身請するだけの力がありやア、
一も二もねえ、海上の鼻をあかしてひけらかして見せるが」

とホツと溜息をつきまするも全く花里の身を思つてくれるからの真実でございます。斯

うシンミリとした話になつて参ると猶さらに悲しくなるもので、花里ももう堪らなくなり
ましたんで、伊之吉の膝にワツと泣き伏しております。此方もたゞ腕をくんで考えるばか
り、智慧どころか中々鼻血も出そうにないので、只だハア〜と申して居る。伊之吉は男
だけに、

伊「コウ、泣いたつて仕方がねえつてことよ、今夜すぐ身うけするつてえんじやアある
まいし、一寸のびれば尋ツてえこともあるんだ、左様くよ〜心配して身体でも悪くし
ちやア詰らねえからなア、まさか間違つたら其の時にまた何とでも仕ようがあらアな、え、
何うするつて、何うでも身請されることは否だ、己らの面を潰すようなことをしては濟ま
ねえつて、解つたよ」

と元氣は付けて居りますものゝ、花里の心が不愠でならないが、何分にも手の付けよう
がありません。それも自分が大芳棟梁の実子であつたなら、又打明けて相談する場合もあ
るがと思ひ、伊之吉も沈んでいる。励まされて花里は顔をあげましたが、胸につかえて居
ることがあるんで浮々々々は出来ません、兩人とも無言で、ジツと顔見合してありますと、
廊下にバタ〜と草履の音がいたした。

新「花里さんの花魁え、花里さんえ」

と呼ばれますから、てつきり海上が来たのだなど、ぞくりとして総毛だちますが、返事をしない訳にはいかないので、

花「あい」

新「おや花魁、此処こゝにいたのですか、人がわるいよ草履までかくして、それも仕方がないわね、伊之さんが来てるんだもの、ホ、ホ、ホ、伊之さんには済まないがね花魁、何うかちよいと顔を出して来ておくんなさいよ、お部屋へ知れると喧やかましくって私らまでが叱られなくつちやアならないからね」

花「ハア往いきますよ、いま直ぐ、また来たのあん畜ちきしやう生が」

伊「身請でも為しようてえ大事なお客様だ、早く往つてきな、畜生みよつりなんつて冥利みよつりが悪かろうぜ、ねえはアちゃん左様そやうじゃねえか」

新「伊之さん、そんな当こすりを云うもんじゃありませんよ、花魁もこの事に付いては何様どんなに心配しているか知れないんでほんとに可愛そうだわ」

花「はアちゃんほんとにこの人の人情のないのには」

新「花魁、そう心配することはありませんわ、伊之さんだつて、ねえ」

と新造は双方を慰めて出てまいります。花里は猶往きそうにもしないから、

伊「早く往つて来ねえな、いよ／＼という時になりやア何うともなるわな」

花「あゝ仕方がないね、まさか間違やア私や死ぬより法は付かないと思つていゝのよ」

伊「ハ、ア、能く死ぬ／＼というな、死なねばならねえ場合ばあにやア一人は殺さねえよ」

花「本当ほんと、嘘じやアあるまいね」

そこは稼業でございますから、花里も嫌だと思つていましたつて、まさか脹れふくツ面もしていられない。座敷へ這入りますと、

花「海上さん何うも済みません、今朝あしたから何処どこで浮氣うきしてました、何なんですね、そんな老とほけた顔をしてさ、お金きんどん一寸ちよいと御覧よ、ホ、／＼、／＼」

と新造の方をふり向きますから、

新「あら、花魁けいお可愛あいそうにねえ海上さん、そんなことアありやしませんね、花魁けいの嫉ち妬なも余あまり手放あしすぎるわ」

花「お金きんどんは駄目だよ、海上さんに惚おぼれてるもんだから肩を持つのだもの」

海「ハ、／＼、何を言つてるんだ、僕はな今朝あしたこゝを出ると青山の長官とくの家へ参り、それから久しゆう行かんによつて上野浅草附近を散歩して」

花「それから吉原なへ行つたんでしよう」

海「イヤ／＼決して参らん、花魁さえ諾うんといつて呉れ、ば、今夜にでも身請してすぐ宿やどの妻にする恋人があるんだもの、何うして外の色香に気がうつるもんか、ねえお金どん、左様そうじゃないか、ハ、ハ、ハ、ハ、」

新「海上さんはお世辞ものですよ、その口で甘く花魁を撫でこみ、血道をあげさせたんですね、ほんとに軍艦ふねの方は油断がならないわ」

花「ほんとにお金どんの云う通りだよ、海上さんは口先きばかりで殺し文句をならべ、私見たいな馬鹿が正直にうけて嬉しがるのを、ねえ、蔭で見えておいでなさったら嘸さぞ面白いでしょね、だけれどそんな罪を作つては良くはありませんよ、ホ、ホ、ホ、ホ、」

海「僕はお世辞なんかを云うものでない、航海前せんに約束したことがあるから、帰朝すると直ぐお前まへのところへ斯うして来ておるじゃないか、僕が約束通り身請しを為しようといえ、何なんの斯かのお前まへの方で引ひぱつて居るの、何うも変だぜ」

花「あらまた、あんな厭味いやみツたらしいことを言つてるよ、この人は、まアお酒でもおあがりなさいな」

と頻りに酌をいただきますは、酔わして寐ねかそうと思うからでげすが、海上も花里の挨拶あいさつがえきりませんから、今夜は是非とも承知させて身請をしよう、大袈裟に身請しては

余計な散り銭も出ることですから、成るべくは親元身請にいたし、幾分でもそのところを安くと考えていらつしやるんですから、中々お酒も例のように召あがらない。新造が傍に居りますときは左様でもありませんが、差向いになると身請の相談で、ひそくと囁いているのは誠に親密らしい。斯うなつてはお座敷が長く容易に引けませんので、花里は気が気ではありません、海上を寐かせておいて直ぐ伊之吉の名代へ参ろうとぞんじて、これでは果しがつかないから、

花「ねえ海上さん、こんな相談をするには緩くりしなけりやア落付かないから、あとで」
海「ウムそれもいゝが、何をいうにもお前が全盛な花魁だから、中々ゆるく話してることが出来ないじやないか、少し話しかけると廻しに出ていくしき、おばさんが迎いに来るかとおもえば、また拍子で出られるしよ」

花「そりや勤めの身だから仕方がないわ、私がいくら貴方の傍にばかり居たくつたつて、お部屋で喧しいから堪忍して下さいよ、本当にそれを言われるといかにも不実でもするよ、うで済まないが、こんなものでも女房にしてやろうというお思召しがあるんだからねえ、私だつて何様に嬉しいか知れやしませんわ、あなたが浮気ッぽいからそれが今からの取越苦勞になつて、末が案じられるんでねえ、海上さんとつくりお前さんの心をきいた上でな

くツちやア」

とじろりと見ますれば、お座なりで言われているとは存じませぬ海上渡さん、熱心に花里の言葉をきいていらツしたが、道理もつともとお思召したやら、うなずいてお出いでになるはしめたと、

花「海上さん、まだお酒をめし上りますか、もういゝでしょう、折角話を為しようと思うところにグウ／＼寐られて仕舞つちやア、ホ／＼／＼」

海「ハ／＼／＼、何うして寐られるもんか、床番させられても起きとるわ」

花「それじゃアお引けにしましょうね」

ポン／＼と手をならしますと、新造がかけて参り、

新「何うもすみません」

花「お金どんお引けになりますから、海上さん便はゞかり所に行きませんか」

海「あゝ行つてこようよ」

新造はあとを片付けながら、若い衆しゅに床をとおして展のべさせます。客と花魁が参るころにはちやんとお支度が出来ておると云う寸法。馴れたことゝは申しながら、まことに手際なものでございます。さアねんねという一段に相成り海上はころりと転がりましたが、花

里はなか／＼容易には寢ません。枕元で煙草の二三服のみました上、つツと立って今度は自分が便所はゞかりにまいる。この間がなか／＼永いもので、漸ようよう／＼再びまいりましたが、また煙草をのみつゝ。

花「海上さん、すまないがね、今一組あがつたから一寸顔ちよいとを出してくる間まつて、下さいよ、ほんとに為しようがないことねえ」

海「あゝ行つて来なとも、情人いろおとこがきたのだらう、早くいつて遣るがいゝ、ハゝゝゝ」

花「憎らしいよ海上さんは、そんなに浮々うわくしてるから、先が案じられるツてえのですわ、つめ／＼しますよ」

と肩のあたり一捻ひとつねりに、

海「あいた、酷ひどいな」

花「まつて、下さいよ」

と言葉をのこして我部屋わがを出ればホツと息つきましたが、この夜よは到頭ねこか寢転しをくわせられ不平でお歸りになり、其の次の夜よも／＼同じような手でうまく逃げられて、何うも身請の相談をまとめることが出来ない。それから致して考えると、花里の言うことゝ行することゝ些ちつとも合わないから、ハテ訝おかしいぞ、口では身請を喜びながら心では嬉しがらぬ

のだな、情夫でもあるのではないか知らん、左もなきときは、誰もかゝる稼業を好んでするものはないに、と気が注ぎましたから段々様子を探つて見ると、伊之吉という情夫のあるので、海上さんも切歯をなされ、えゝ知らざりし彼が言葉のみを信じて身請まで為ようとしたは通りであつた、併し男子が一旦この女を妻にと見込みながら、情夫があるからと云つてやみ／＼手を引くは愚のいたりである、貞操全き婦人というではなし、高が路傍の花、誰れの手にも手折るに難からざるものだ、この上の手段は彼女を公然身請して、仮令三日でもよろしい我物にすればそれで気はすむ、最早親元身請などの吝嗇くさいことは云わぬと、妙なところに意気味を出されたもので、海上さんは直接に花里身請のことをお部屋へ懸合われました。お部屋では利分のつくこととでございませうから、二つ返事で承知いたし、花里の身代金三百五十円にて相談が極りました。これが昔でございませうと、当人が何と申そうとも、楼主の压制で身請させて仕舞うのでげすが、当今の有難さは金を出して抱えている娼妓だと云つて、楼主の自由にするには出来ません。当人が承諾しなければ自儘に人身売買をしてはならん。ところでお部屋からは嘸んでふくめるように花里へ説諭しますが、何うしても諾とは申しませぬ。当人はいやだといひ客からは何うだ／＼と催促されますので、実はお部屋でも弱りきつて持てあまし、と申して見す／＼儲かるものを

当人がいやだというからつて其の儘にしては、後々他の娼妓に示しがきかぬ。脅してなりとも花里にさえ諾といわせれば、それで此方の役目はすみ、お金にもなること、慾が手伝いましては義理人情も兎角に外ツ方へよつて仕舞うもので、お部屋からの言付けだと、伊之吉は到頭お履物はきものにされまして二階をせかれ、花里は遣手新造までにいろく意見させて見ましたが、いつかな動きません。強情にも程のあつたものだ、とお部屋でも今は憎しみが掛り花里は呼付けられます。小言をきくは覚悟の前で、今日は何とつて言訳をしようか、たゞ厭とばかりは申すことが出来ない、何ういい抜けをして逃れようかと心配しますれば、胸も痞つかえて一杯でございます。

楼「花魁、こゝへ来なさい、何もそんなにうじくしてゐることはないから」

花「はい」

とは申しますもの、窈そつと楼主の顔をみますれば、何となく穩かでない、幾度となく身請のことを口を酸ツぱくして論しても、花里は諾うんと申さないから焦しれているんで。随分娼妓ども達には能くしてやる楼主でございますが、花里のように強情ばかり張つて申すことを聞き分わけませんから、今は意地になつて居ります。抱え娼妓しょうぎに斯う我儘をされるようでは他はたへ示しが付かぬ、何うにでも圧おしつけて花里を身請させねばならぬと申す気が一杯でげすから

堪りません。これを見ると花里はゾクリといたし襟元から水を打掛ぶつかけられるような気がする。そうすると直ぐ悲しくなつて眼には涙を催してまいりますが、坐らない訳にはまいりませんから、針の筵むしろうにいる気で楼主の前に坐り下を向いたまゝで顔を上げない。

楼「花魁、この間から度々たびくいう事だが、お前海上さんの方へ何う御返事をする積りなのだえ、よく考えて御覽、いつまで斯こんな稼業をしているが外見みえではあるまいしね、お前とて子供ではなし、それぐらいのことはよく分るだろうが、それにお前の気ではあの青二才の伊之吉と約束があつて情を立てる積りだろうがね、それは大きな間違といふものだ、近いところが此楼こくにいたあの綾衣あやぎぬがいゝお手本だよ、あんな夢中になつて初はつさんのところへ行き、惚れた同士だから嘸さぞ中好なかよく毎日暮すだろうと、楼うちじゆう中の羨うらやみものだったは知つてゐるだろう、それが御覽なさい、物の三日も経たないうちから喧嘩する、末はどうとう夫婦別れして綾衣は今じやア新造衆になつてゐるじやないか、又瀬川せがわはいやだゝと云いながら、お前と同じように痺しびれを切らした末が、海軍の方に身請されたが、今じやアお前横須賀で所帯をもち、奥様といわれ立派になつてゐるよ、まア物ごとすべとは凡そて左様さういふものでね、この稼業なで惚れた腫れたで一緒になつたものは兎角お互に我儘わがままが出て、末始終を添い遂げられるものでないからね、お前もよくそのところを考えて海上さんに身請され、気

楽に暮すが当世だろうぜ、え、花魁、何うだね、分つたらうね」

花「はい」

楼「分つたら、身請されて廃業するだろうね」

花「旦那さんを始めとして皆さん方も、いろ／＼と御親切に仰やって下さいますが、こればかりは御勘弁遊ばして、何うかこのまゝ」

と申しながら、はや得堪ええずなりましたやら、ワツと泣き伏しますので、楼主もいよ／＼呆れ、強情にも程のあつたものだ、其の身の為を思つて意見してやるを無にして我がを通そうとするが面にくいといら／＼として参つたので、常にはなかく思慮ある楼主でげすが、斯うしたときは我を忘れるもので、傍らかたわにござりました延のべの長煙管を取るも遅しと、花里を丁々と折檻せつかんいたします。これが此のごろのようにない前の花里なら楼主がそうした乱暴をする気遣いありません。また他はたのものも直ぐ駈けつけ参つて詫言もしてやりませんが、何をいうにも伊之吉へ一心を入れて情を立てる為に飽あまで強情をはり、他人ひとの意見を用いませんで憎がられているときでげす。誰だつて止めるものはない。花里は散々に打擲ちようちやくされて悲鳴をあげていましたところへ、ばたく／＼と駈けて参つたものがございませぬので、楼主もハツと気が注ついて手をとゞめ、

楼「だれだえ、其処へ来たのは」

小「はい、私でございます」

楼「そういう声は、小主水じゃアないか」

小「はい、その妓のことで、旦那さんに少々おねがいがございます」

楼「花里のことでおねがいただと、花魁、それは廃てくんな、こんな強情ものに口をきいてやったツても心配の仕甲斐がないからね」

小「そうではございませうが、もとは私の部屋から出したもの、旦那さんや皆さん方に御苦労をかけるがお気の毒、今までは出しゃばつてはと控えていましたが、もう何うも引込んでいられない今日の様子、何うか一応は私にお任せなすつては下さいますまいか、及ばずながら意見をして見ませう、皆さんの御意見でさえ柔順すなおにいう事をきかないんですから何うで駄目でしょうけれど」

と小主水が様子あり気な取なしでげすし、殊にこの花魁の言うことは、元世話になつたと花里は一目も二目もおいておりますから、楼主も承知いたし、

楼「それでは小主水の花魁、お前に預けますから、何うか意見をして遣つて下さい、私もこの妓が悪うて折檻までするのではないからね」

小「旦那さんの御親切はよく存じて居ります、花里さん何うしたんですよ、ほんとに困りますねえ、さア私と一緒ににお出でなさい」

泣き伏しております花里の手を引いて小主水は己が部屋へ帰りました。花里はよう／＼にいたして涙をほらい、

花「姉さん何うも済みません、とんだ御心配をかけましてねえ」

小「済むも済まないもありやしません、花里さんお前さん全体何うする気だい、この身請にどこまでも楯ついて強情を張り通すつもりかい、そりや伊之さんとの交情もよく知つているから、今までは他の人達が何のかのと言つて意見しているのを知らず顔でいたんだがね、今日のように内所で折檻されるを何うも見てはいられないから、疾くとお前さんの了簡をきいた上で、ねえ、また膝とも談合というから話し敵にもなるつもりなの、些とも遠慮することはないから、本当のところを言つてきかせて下さい、私は何でも内所のいうなりにお成りとは言わないよ、海上さんの身請が否なら、否のようにまた為る仕方もあるだろうからね」

花「有難うございます、本当に済みません」

と又泣きくずおれまする姿を見るにつけ、其の心の中を推量致すと小主水も可愛そうに

なつて堪りません、命までもと入揚いりあげております情人は二階を堰せかれて仕舞い、厭な客に身請されねばならぬのでげすから、我身も此様こんな場合にあつたら矢ツ張りこの様に意地を立て、どこまでも情人の為に情を貫ぬくかも知れぬと思ひますと、何うも花里に同情を寄せられるような気がいたし、胸もふさがつて参り、何なんとも意見の仕様がございませぬ、暫らくはジツと見詰めていましたが、それも憐いじらしくて見ていられぬ。泣なごえを立てじと忍びまする度たびに根のぬけた島田がぐりぐりして顫ふるいますから、何うも身請をすゝめる事の出来ないばかりじやアございませぬ、感情に制せられては他人ひとのことで涙が浮いてまいり、横を向いて仕舞いましたが、それでも気にかゝりますので、またちよいくと花里の泣伏す姿を見て、目を数しばた叩たたいておりましたが、左様そう何時までも黙つていたとて際限がないと、

小「ねえ花里さん、じやア何うしても海上さんのところへは行きませぬね」

花「姉さん、すまないが堪忍して下さい」

と申したきり、また小主水も花里も無言でいましたが、花里は何なんと思ひましたか、顔をあげて涙をはらい、

花「姉さん、私は諦めました、いろく御心配をかけて、とても伊之さんと添うことは出来ませぬから」

と云ううちにまた眼には一杯の涙がたまりましたを襦袢じゆばんの袖でふき、ホツと溜息つき、力なく、

花「仕方がありません、海上さんに身請されますわ、今までいろ／＼とお世話になりまして、御親切にして下さった御恩は決して忘れません、十二私わたくしがあの人に義理さえ欠いてしまえば、それで何事もありやアしませんわ、ほんとに姉さんの御恩は」

と合掌しますので、小主水は花里の様子に目もはなさず見ていましたが、我知らずほろり／＼と涙をこぼしているに、花里もこれに誘われましたか、また突伏つっぷして仕舞いました。小主水は一層そぼ傍へすり寄って、

小「花里さん、お前さんは、其の了簡はわるいよ、短気を起しては」

花「いゝえ、決して」

小「お隠しでない、お前さんが三日でも海上さんのところへ行っていて駈出すような気なら心配はしないが、仮令たとえ一日でも、伊之さんへ義理立てをするんだから、諦めたと言いなさるは死ぬ気でしよう、そんな短気を起しては宜よくないよ、それも無理とは思わないが、突詰めたことすれば伊之さんだったって、あとで何様どんなに悲しがんなさるか知れやアしないわ、死ぬ気で、ねえ花里さん」

花「それだから海上さんのとこへ行くつもり、そうすれば御内所ごないしよでも」

小「まだそんな事をいつているよ、私にまで隠して、何うでもお前さんは死ぬ気かえ、これほど為を思い、お前さんの心を察して言つてあげるのに」

と小主水は少しくムツとして見せますれば、花里は猶更かなしくなり、摺寄つて小主水の膝しがみつに獅噛しがみつ付きますのを、払いのけ、

小「本当に分らないにも程があるじゃないか、私にばかり口を酸すつばくさしてさ」

花「姉さん、私何うしよう、姉さんに左様そとういわれツちまやア、仕方がないじゃありませんか」

といよ／＼突詰めた様子でげすから、小主水ももう仕方がありません、この上は打捨うちちやつておけば大騒ぎになるんですから、ます／＼不愆ふびんは加わります。こんなに思っているんだから、せめて一日でも伊之吉に添よわしてやりたいと思案しよあんにくれましたが、やがて花里の耳に口をよせ何事なにごとでございますか囁ささやきます。

花「姉さん、何うも」

小「いけなかつたらそれまで、まア遣つて御覽」

八

エー和国楼の花里は姉と立てゝおりまする小主水の意見に従いましたことでげすから、いよく身請される相談が極り、今夜は海上がお金を持ってまいり、楼主に渡して引き祝いに朋輩を総仕舞にいたし、陽気に一花咲かせる事に相成りました。花里も進まぬながらそれ／＼と支度をいたせば、小主水もいろ／＼に世話をやきまして、傍から注意いたして居ります。朋輩女郎たちは年期で出るでなく身請ときいては羨ましいので、入り替り立かわり、花里の部屋へまいり名残を惜むもありますれば、喜びを申すもあります。また廊下などで立話をしているをきけば、

○「いよく花里さんは、海上さんのところへ行くツてねえ、今夜が身請になるんだツて、^{ほんと}本当にうらやましいわ、私や花里さんが出たら、あの部屋へ越そうと思ってるのよ」

▲「私だツて覗^{ねら}つているのさ、本当にあの座敷は延喜^{えんぎ}がいゝからねえ、瀬川さんだツてあの座敷から身請されたのだし、今度の花里さんだツて矢ツ張りなのだから、それに二人とも海軍の方だものねえ」

×「花里さんの麩^ひくのは瀬川さんたア一緒にならないわ、あんなに血道をあげてる伊之

さんてえ情人ひとがあるんだから、海上さんは踏台ひたにされるに違ちがいないのよ、何うして花里さんが伊之さんと切きれられるものかね、また無理もないから、男ぶりも好よく厭味いやみツ気がないのなもの」

△「ハクシヨ岡惚おかぼツてるよ、この人は」

□「何うも憚はげりさま、花里さんが出て仕舞えば伊之さんは私が呼ぶのよ、その時にやア屹度おごるからね、ホ、ホ、ホ、ホ、」

○「馬鹿ばかにしてるよ、本ほん当とうに」

なんかんと風説うわさしております、そのうちに張見世はりみせの時刻になりましたが、総仕舞で八重やえの揚代ぎやくが付ついて居りますから、張見世をするものはございません、皆海上の来るのを待つている。併しかし外のお客を取らないというのではありませんから、初会でも馴染でもお客のあるものはずん／＼取っている。その家々うちの風ふうで変へりはありますが、敵娼あいかたの義理ぎりから外の女郎じやろうを仕舞わせるほど馬鹿々々しいものはありますまい。それぐらいなら溝せうの中へ打捨うちる方が遥かましでしょう。何うも済すませんとか有難うござるとかいう一口が揚代一本になるんですからねえ。それも仕舞つてやったお客には何の挨拶もするでなく、その娼妓が紅梅なら、紅梅の花魁けいへのみの会釈えいせきでげすから癪さかにさわるじゃありませんか。とんで

もねえ鼻ツたらし扱いされるんでげすから、併しあの場所へ浮れてお出で遊ばす方はそんなことに御頓着ごとんじやくはなさらぬものでな、お気に召した花魁でも参り、程のよいお世辞の一つも言われると、土砂をかけた仏様のようにお成んなさる。余事はさておき、意地を張つて身請を拒みました花里も、小主水の説得に伏ふくしていよく、廃業すると申しますので、海上渡さんはお鼻が高うございます。意地ばつて楯をつくころは女の小面こづらを見ても腹が立つものだそうですが、さて先方さきから折れて出れば元より憎い女でない、廃業祝ひきいわいには当人の顔は勿論ですが、廃業ひかせるお客海上の顔にもかゝるんですから、立派にして遣らねばならぬ、立派にしてやるが青二才の職人風情に真似の出来るもんか、己と競争し為ようと思つたツて到底とても及ぶまいと、大奮発おほはりこみでございます。花魁花里が廃業祝の支度と、のい、もう海上さんがお出でになるころと待ちうけて居ります。路傍の花いまゝでは誰たれか彼れの差別なしに手折たおることが出来る、いよく花里の身があがなわれて見れば、なか／＼自由にはなりません、主ぬしあるお庭の桜でげす。手でも付けようものなら、それこそ大變がおこるツていうような訳となります。彼の情人いろの伊之吉でげすが、エー、花魁は決して海上になびく氣遣いはない、まかり間違えば死のうとまでしたんだから、それに文ふみの模様では小主水花魁が相変らず親切に真身しんみになつて世話をしておくんなさるてえから、大丈夫だ心

配することは無いが、何うも氣になつてたまらんよ、ゆうべ小主水花魁から届いた文のよ
うに旨くゆけばよいが、そうは問屋といやでおろしそうもないて、ひよつと仕損じて花里さんえ
何処どこへ往ゆくんです、さアお座敷へお出でなさいよと云われた日にヤア仕方がない、いかに
小主水の花魁でも斯うなつたら何うも仕様があるまい、事がグレ蛤はまとなつた時は馬鹿を見
るのが己おひら一人だ、あれもいや／＼海上に連れられて行く、イヤ／＼仮令たとえつれられて行け
ばとて無事でいる氣遣いはない、花里あれの性質はよ／＼知つているが、己おひらを袖にして生き
てはいぬ、が、花里あれとても素人じやアなし、多くのお客に肌身をゆるし可愛かわいのすべツたの
と云う娼妓だ、いくらあゝ立派な口をきゝ、飽まで己おひらに情をたてると云つてゝも、フイ
と氣が變つて海上に靡なびかないとも限らないから、と頻しきりに考え込んでゐるのは伊之吉でげ
すがね。花里が小主水の差金さしがねで身請を諾たくしますと直ぐ、伊之吉の許もとへ品川から使い屋が
飛んでまいつた。此のごろは二階を堰せかれてゐるんでげすから、折々花魁から使い屋をた
てゝ文の遣取やりとりに心を通じてゐる場合、何か急な用が出来て花里から使い屋をよこしたの
だと思ひますと、小主水からの使いで、文面を読むたびに恚びつくりばかりいたしましたが、親
切に細こま々書いてあるから伊之吉もその通りにいたし、身請の当夜を待ち、指図のごと
く一艘の小舟を借りまして、宵の口から品川しんがわの海辺に出で汐を見ますと、丁度高潮まわり

で段々と汐のさしてまいる端はなでげすから、伊之吉喜び勇みまして、舟を和国楼の石垣のとこへつけ、息を殺して潜んでいるのでございます。すると夜風は身にしみて肌さぶく相成り、二階ではお酒が始まり芸妓げいしやが騒ぎはじめますから、馬鹿々々しくなつて堪りません。舟底にころりとやつて居りましたが、気が揉めますから、首をあげて二階を見ますると、障子にヒヨイ／＼男や女の影法師がうつる。またはワーワツと笑いごえの致すのが、自分を嘲ちやうろう弄ろうするようにも聞き取れますんで、いろ／＼の考えをおこし、ムシヤクシヤしてまいる。左様そうかといつて自分は忍んでいる身でございますから、うっかり頭をあげたり舟を動かすことは出来ません。若もしも石垣へばしやり／＼波があたつて楼中で気が注つかれて見ると、百日の説法も屁一つになるんでげすからな。その心配というものは容易でありません。伸びつ反りそついたして楼内うちの様子にばかり気を配つて、此処こゝへ舟をつけて待つていてくれろというからは、屹度花里が忍んで出てくる手段てだてに違ちがいなかろう、小主水の花魁けいは天晴あつぱれ男まさりの働きがある女だから、万に一つも遣り損じはあるまいが、何をいうにも大勢の人の目を掠かすめて脱ぬけ出させるのだから旨く行つてくれ／＼ば宜いいがと、庭の方で足音でもしはせぬかと、そればかりに耳をたて／＼おりますが、さつぱり足音もしない。二階ではいよ／＼大騒ぎで、陽気になつてまいる。すると花里々々ところえがチラリ／＼と聞える

ので、また一層の苦になつて堪りません。エ、詰らない馬鹿々々しいや、斯うして心配しているのに彼女あいつは、あの仲間にはいつて笑つてゐるかも知れんと、水上警察の巡廻船に注意いたしつゝ、そつと首をあげまして石垣につかまり、伸びあがつて楼内うちの様子をうかがつています。と、庭は真闇まっくらでげすから些ちつとも分りませんが、海面に向つてある裏木戸のところ、コツリガチャリという音がするので、伊之吉は恟りいたし伸した首をちゞめ、また舟の中に小さくなつてゐる、錠でも外すような音がいよ／＼耳につきまますから、またそつと伸あがつて木戸のあたりを透すかして見ますると、暗夜やみで判然はつきりとは分りませんが、何だか白いふわり／＼としたものが見えました。それから熟よく耳を澄すましてきゝますと人の息をするようでげすな。ハテ来たなと思ひますから、怖こわ々々、石垣の上へあがり匍はらばい這になつて木戸のところまで匍はつてまいり、様子をきゝますと内のもは外に人がいると知りません模様で、しきりに錠を外そうといたしておりますから、伊之吉も今時分こゝへ外ほかのものが来る筈はないとぞんじ、静かに木戸わきの際へ立ちよりまして、

伊「花魁かい」

と声をかけました。大抵さきなら先方でも恟りするんでげすが、そこは約束のしてあることでございます。先方でも些ちつとも驚いた模様もありませんで、

花「伊之さんですか」

と焦^じれてガチリと音させ、よう／＼錠をはずし木戸をひらき、出てまいりますと、只何^{なん}にも言わず伊之吉に取りすがつて顫^{ふる}えております。伊之吉とてこんなことを遣^へるは臍^{へそ}の緒きつて始めての芸で、実は怖^{おっ}かな恟^{おつ}りでおるんでけすが、何^{なん}と云つてもそこへまいると男は男だけの度胸のあるもので、

伊「これ、折角斯うして逃げ出したもんだから、早くこの舟に乗んねえな、ぐず／＼していて見附けられた日にやア、虻蜂とらずで詰らねえからな、エ、もうちつとだ確^{しつ}かりしねえな」

と小声で申しながら、花里の手を取つて、怖^{おっ}ながるをよう／＼舟にのせましたので、まアと一安心いたしました。早くこゝを遠^{とおほ}走^しつて仕舞わないと大変と存じますから、花里には舟底のところを忍ばせ上から苦^{くま}をかけまして、伊之吉は片肌ぬぎかなんかで櫓^ろを漕^こいで、セッセと芝浜の方へまいります。それも燈火^{あかり}がなくては水上の巡廻船に咎^{とが}められる恐れがありますから、漁師が夜網^{よあみ}など打ちにまいるとき使う、巡^{おまわり}査^ささんが持つていらつしやる角燈^{かくとう}のようなものまで注意して持つてきているから、それに燈火^{あかし}をいれて平気で漕いでまいりました。いまは品川も遙かあとになりましたから、ホツと息をつき、

伊「花里さん、もう些ちつとだから辛抱しておいでよ、ちよいと首を出して御覽、品川はあんなに遠くなつたから、此処こゝまで来れば大丈夫鉄かねの鞋わらじだ、己おれらは強えらくなつたぜ」

花「そう、本ほん当とにすまないことね、お前さんに此様こんな苦勞までかけてき、堪忍して下さいよ、これも前世からの約束ごとかも知れないわ」

伊「何も礼をいうことアねえや、お互たげえに斯うなつてるんだから」

花「今度の事には姉さんに、まアどんなに心配をかけたか知れないので」

伊「そうよ、小主水姉さんには本ほん当とにすまねえが、實に彼あの人は兩人ふたりが為には結ぶの神だよ」

花「はア本ほん当とにそうですわ」

伊「兩人おちつが落著おちついたら何うしてもこの恩を報かえさねば、畜ちき生しょうにも劣るから、己おれらは」

と跡い言いかけまするとき、ギイ〜と櫓壺きしの軋きしる音がして、燈火あかしがちらり〜とさす舟が

漕こぎまいます。伊之吉は俄に花里を制し、また元の如く苦かを冠かぶらせてしまいました。さ

て和国楼でございますが、肝腎かんじんの花里がいま身請みかきの酒宴さかもりと申す最中もなかに逃亡もなかいたしましたん

ですから、楼中の騒さわぎは一通りではありません、上を下へとゴツタ返して探たづねましたが、

中々知れそうな理由わけはありません。まさか伊之吉が舟を持って来て連れていったとは知れ

よう筈がない。海の中にいるんで、陸を探したとて跡のつく氣遣いなし。海上も一時はカツと怒られて、外のものに当り散らしては見たが、相手のない喧嘩は何うもはえないもので、到頭そのまゝ泣き寝入で、只だ器量を下げてお引下がりになりました。併し和国楼では、花里に逃げられたから、それで宜いわと済まされませんから、それ／＼の手続きも致さねばならぬ、品川警察へ逃亡のお届けをいたし、若しや伊之吉のところへ参つて居らぬかと、追手を出して探させましたが、さつぱり解らず、伊之吉は平生に變つたこともなく、此の頃では仕事場へも出まして稼いでおりますから、何うしても手懸りが付きません。品川警察へ呼出されてお調べに相成つたこともございますが、伊之吉の申し開きは立派にたち、放還になつて見れば花里の行方はますます手懸りが切れたようなもの。たゞ和国楼の庭口の木戸のあいていたというところで、海中へ身を投げて死んだのであろうと評判でございました。ナニ伊之吉がちゃんと他へ隠してあるのが知れませんが、不思議なもので、お取締りは随分嚴重になつて、コラお前の家には同居人はおらんか、と戸籍調べのお巡查さんはお出遊ばしても、左様重箱の角までの世話の届くものではありません、早いところが我々どもの家でさえ、あ左衛門が、ちよいとホマチを遣るのを主人が知らずに居ることは幾らもあります。これは、何うもはや、読者方の御新造様が決して左様なき

もしいことを遊ばす気遣いは毛頭ごぎいませんが、我々仲間の左衛門尉さえもんには兎角ありがちのことで、亭主に隠して焼芋でも買うお鳥目をハシけるは珍らしくないことな。イヤこれは余計な贅むだごと言を申し上げ恐れ入ります。兎に角、花里花魁の行方は知れずには経ちました。

九

神奈川在の甚兵衛夫婦をたよりてまいりました、お若伊之助でございます。甚兵衛夫婦も疾とく世を去り、月日はいつかふたむかし昔むかしをすぎまして、二度目に生れた岩次と申す息子も十八歳と相成りましたくらいでげすから、お若さんも年を取りましたな。皺しわは一杯額かぶに波うちますし、髪かみの毛は薄くなる、昔の面影はありません。それに永く田舎くすに燻くすぶっていたんだから、まことに妙なもので、何う見ても田舎ものでげすつて、伊之助もその通りで、何事もなく暮していましたが、さて何となく気にかゝつてなりませんから、お若さんも伊之助と相談いたし、兎に角伯父の高根晋齋わびごとが生きているうちに詫言わびごとせんと、久し振で東京へ出てまいり、まだ鳶頭かしらの勝五郎も生きているに違ちがいからつて、尋ねてまいりまし

たは下谷の二長町にちようまちでげすが、勝五郎の住すまつていた長屋は矢ツ張りごぎいますんで、お両ふ人はヤレよかつたと喜び、台所口からのぞいて見ると、朝のことでげすから勝五郎は火鉢たたりのわきで楊枝をつかつている、自分の年をとったことは分りませんが、他人ひとの老けたのは能くわかるもので、

若「ちよいとお前さん御覽なさい、鳶頭も大層年をとりましたことねえ」

伊「成程すつかり胡麻塩になつちまつた、己おひらだつて他人ひとから見ると、矢ツ張り爺い婆アになつてるんだよ」

若「本ほん当とにそうでしょうねえ、神奈川へ行つたのも昨日今日のように思つてるが、一ふたむ十年かにもなるんだからねえ、高根の伯父もさぞ年をとつたでしょう、まさかも頑固もいいますまいよ」

伊「岩の手前てめえも面目ねえや、ハ、ハ、ハ、そんな事を言つてたつて始まらねえ」

と伊之助が訪おといまして、神奈川在からお若と伊之助が尋ねて参つたと申すと、楊枝くわを啣くわえておりました勝五郎は恟りいたし、台所へ飛んでまいり両人ふたりの顔をしげくとながめましたが、急に眉毛に唾をつけますから、お若さんは、

若「鳶頭、何うも久し振ですねえ、お前さんも相かわらず御丈夫で何よりですよ、先年

はいろくお世話になりましたねえ、ほんと本當にすみませんでしたこと、今度こうして兩人でお宅へまいったのは、あれを見て下さい、あのようになった息子までも出来た夫婦ですから、是非お前さんの袖にすがって伯父さんにお詫をしていただき、永らくかけた御苦労の御恩を返そうとおもつてね、それで態々わざく来たんですから、鳶頭どうか、お前さんより外に頼むものもないんだからお願ひ申します」

伊「今お若からも申すとおり、お前さんが夫婦の手引きだから、面倒でもあろうし、先頃お前さんの意見をきかなかつた腹立もあるうが、ねえ鳶頭、どうか昔のことは言わずに一肌いれて下さい」

と頼みまする様子に勝五郎はいよく悔りいたし、開いた口は塞ふさがりません。と申すはお若さんでげす。再び伊之助と腐れ縁が結びまして、とんでもない事になるところを根岸の高根晋齋が家うちへ引取られましたから、病気で一歩ひとあしも外へ出たことがございません。今でも現に晋齋のところにはぶら／＼としていますからね。元より大病というではありませんから今はお医師いしやにもかゝらず、たゞ気まかせにさせてあるんで、尤も最初はじめのうちには晋齋も可愛そうだと思召し、せめて病気だけは癒なほしてやろうと、いろ／＼のお医者におかけなされましたが、さつぱり効験きくめがない。お医者にかけないからツと悪くなるでも

ありませんから、二十年から鬱々^{うつく}と過しているんでげす。さア左様^{そう}いう風でございますのに、また一人お若さんが出来て、子供までつれてお出^{いで}なされたんですから、鳶頭の驚きまするは当^{あたりまえ}然^えで、幾らくびを曲げ眉毛に唾をつけましても、その理由^{わけ}はわかりません。こいつは不思議だぞ、さきに根岸では伊之助が二人出来た例^{ためし}もある、こんどはお若さんが二人になったは不思議だ、これは何れか一人のお若さんは屹度^{いげ}変化にちがいない、併し根岸の高根晋齋先生のところにござるお若さんが、ヨモ変化である筈^{はず}はないことだ、そうすると今伊之助と一緒にまいつているお若さんが訝^{おか}しい、斯う考えて見ると伊之助も変化かも知れない、根岸で先生がズドーンとやった狸^{たぬこ}公^{こう}が、ア、それに違いないと、ぶるくツと顫^{ふる}えあがるのに、お若も伊之助も呆氣にとられてこれも茫^{ぼんやり}然^{ぜん}いたしていましたが、何時^{いつ}まで睨^{にら}みツこを致^{いた}してたとて果^{はて}しがありませんから、

若「鳶頭、お前さんは矢ツ張りわたし等を憎んで、この願いをきいては下さらないのですか」

勝「なに、そんなことじゃアござえません、が、何うもおつりきで」

若「エ、おつりきとは、そりやなんの事で」

勝「なにさ、それは此方^{こつち}のことで」

と申しながら不承不承請合いまして、下谷二長町からドン／＼根岸へやつてまいりました。高根晋齋は庭に出て頻りに掃除をなすつていらつしやいます。そのお座敷は南向でございませうから、日が一杯にあたつて誠に暖かでございますから、病人のお若さんも縁側へ出て日向ぼこりをいたしながら伯父さんと談をいたしておりますところへ、書生さんがお出でになりました、

書「エ、先生、先生ッ」

晋「なんじや」

書「鳶頭の勝五郎がまいりまして、至急お目にかゝりたいと申しますが」

晋「左様か……こちらへ通しなさい、また何かそゝツかしやが詰らぬことに目を丸くしてまいつたと見えるな、彼も若い時分から些とも変らないそゝつかしい奴だが、あんな正直な人間もすくないよ、稼業柄に似合わない男だ」

と仰やりながら、ポン／＼と裾をはたいて縁側へお上りになりますとき、永のお出入で晋齋先生のお気に入りでげすから、勝五郎はずか／＼とおくへまいりまして、そこに出ておいでなさるお若さんを珍らしそうにながめ、何だか変挺の様子で考え、まことに茫然といたして居ります。

晋「鳶頭か、よくお出でだね、お前何か心配なことでもあるのか、大層かんがえていなさるね」

勝「先生様、奇きてえ体なことがおツぽだかつたんで、またね、狸たぬこ公がお若さんに化けてめえりやしたぜ」

晋「オイ、鳶頭は何うかしているよ、お前おかしな事をいうねえ、気を落付けてゆつくり物を言いな、些わとも理由が解らないじやないか」

勝「それがね、先生大変なんで、今狸公のお若さんが、あの伊之助野郎と一緒に私わの家へ来ているんですから、変ま挺じやげえせんか」

晋「何なんだと……狸のお若が伊之助と一緒にお前のところへ来た、ハ、ハ、ハ、馬鹿をいいなさい、お前寝惚なぼけているんじゃないかい、そんなことがあるものか」

勝「ソ、それがね、全くなんで、全くお若さんが伊之助をつれ、若い男までも引張つて来ているに違ちがいなんでげす、先生にお詫わをしてくれッて」

晋「ハ、ハ、ハ、いよ、誂おしいよ、お若はこゝにいるじやないか、殊とに二十年来の病気で外出したこのないものがお前うの家へ行くわけがないよ」

勝「さアそこだッて、それだから狸公だ、てつきり狸公にちがいないんで、よく化けあ

がったな、ナニようがす、先生、貴方さまが根岸でパチンとおやんなすった短銃ピストルはあるでしょうねえ、それを私わっちにかしておくんなせえまし、今度は私がパチンとやって遣るんだ」

と急あせり切つて前後不揃ぶぞろいにお若伊之助のまいった次第を話しますので、晋齋も不審には
 思いますが、自分に遇あつて詫しを為ようと申すは不測ふしぎな理由わけ、ことに子供まで出来十八九ともなつているとは解せらぬ事だと、目を閉じて考えてお在いでになると、勝五郎は短銃を貸せ、
 打つて仕舞うからと急せきたてます。晋齋は最早八十からにお成り遊ばす老人でいらつしやる
 が学問もなか／＼お出来になる偉いお方でございますから、先ずお若伊之助と名のるもの
 に面会いたした上で、その者等が様子を篤とくと見極めてもしも変化のものなら、なんの年
 こそとつていれ狐狸こりたごらに誑たごらかされる氣遣いはないと、御決心あそばしましたから、

晋「勝五郎、まアそんなに無闇なことをいたしてはなりません、私わしに遇あひたいと申すな
 ら遇つてやりましょう、つれてお出でなさい」

勝「へー、先生様は狸公にお遇あひなされますか」

晋「イヤ狸であろうと狐であろうと、遇あひたいと申すものには遇つてやりましょうよ、
 ぐず／＼言わずに伴つれてお出でなさいよ」

勝「へー、伴つれて来いと仰しやいますなら伴つれてまいりますかね、若し途中で私わっちをばか

して蚯蚓のおそばや、肥溜の行水なんぞつかわされはしますまいか」

晋「馬鹿を云いなさい、人間が心を臍下に落付けていさいすれば決して狐狸に誑されるものでないから」

と説諭されましたので、勝五郎は彼の尋ねてまいったお若と伊之助、それに悴の岩次をつれて参りました。高根晋齋は三人の親子を奥へ請じて対面に相成ります。お若と伊之助は頻りに身の淫奔を詫び、何うかこれまでの行いはお許し下さる様にと他事はございません。妖怪変化のものは如何によく化けますといつても、必ず耳が動くものだそうにございませぬ。そこは畜生の悲しいところで、晋齋老人は何にも仰しやらず、ジツと見詰めておいで遊ばすが、三人の人間に少しも怪しいところがない、殊に不思議なのはお若さんで、年配から言葉音声、額によりまする小皺まで寸分かわりませぬ、只だかわつてゐるところはお頭髪でげす、此家においてになるお若さんは病中でいらつしやるから、お頭髮なんかにお構いなさらないんで、櫛にくるくるとまいてありますが、今勝五郎のつれて来たお若さんは丸鬘に結つていらつしやる。それとお衣類にちがったところがあるばかりでございます。晋齋老人もこの場の様子が不思議に思召す。何うもお若さんが二人になつてゐる理由がお解りになりませぬ。成程これでは勝五郎が恟りするも無理でない、乃公も八

十年から生きて世間のあらゆる事には当って来ているし、随分経験もあるが、こんな訝おかしなことはない、根岸で伊之助が二人あったことはあるが、あれは一方が変化のものということの認めがついて、短銃でパチンとやツつけたが、今度のは怪しいところちつが些ちつともないから無暗むやみなことは出来ぬ、とじろり／＼お若さんを見ては考えていらつしやる、先刻さつきからいくら経つても伯父さんからお言葉が出ないので、

若「伯父さん、私が重々不調法のだんはお詫いたします、どうか御勘弁あそばして、こゝへ伴つれてまいったは岩次と申し、この人と神奈川におりますうち産みました子で、岩次、これがかね／＼お前にも話した根岸の伯父さんツてえので、お前には大伯父さんだから、よく御挨拶をなさい、柄ばかり大きゆうございませうが、田舎で育つたんですから行儀も知りませんし、カラ意気いき地ぢがありませんよ、伯父さん／＼」

と申しますから、言葉を交さない訳にはまいりませんので、晋齋老人も一通りの挨拶をよう／＼なさいました。それから両人ふたりの身の上についていろ／＼お聞きなされ、その間は少しでも油断なく御注意あそばしましたが、何うしても狐狸なんかでないようでげすから、ます／＼不審であるから、これは病人でいるお若に遇わし二人を並べて置いての詮議より仕方がない、と御決心あそばし、

晋「お若や、ちよいと此処へお出で、伊之助が尋ねてまいったから」

と仰しやると、一緒に参つて居るお若さんは平氣できいて居る。只だ莞爾したばかりで不審らしい顔もしません。やがて奥から嬉しそうにして出てまいった病人のお若さん、これもたゞ莞爾いたして伊之助の傍へびつたり坐り、別に挨拶をするでもなく澄している。おどろきました伊之助、きよろ／＼と兩人のお若さんを見まわし呆氣にとられる。息子の岩次も俄にお母様が二人出来たのでげすから、これもポーツといたしています。晋齋老人は流石に博識な方でげすから、二人のお若さんに目もはなさず御覧になつて居る。するとお若さんの形こそ両つになつておりますが、その様子におきましては兩人とも同じことです。一方のお若さんが物を言いかけますれば、言葉は発しません一方でも口をムグ／＼いたしておる。また一方でお頭髪をおかきになれば一方でもお櫛でお頭をおかきなさる、そのさまが実に不思議でげす。そう斯ういたして居りますと高根さんの門外で容易ならぬ人ごえがするんで、晋齋老人耳をお立てなされ、縁側へお出遊ばして生垣の外を御覧になると、若い男女を三四人の男が引立てようといたして居る。そのうちに女は何うすり脱けましたかバタ／＼と晋齋の邸内へ逃込みました。窮鳥懐にいるときは獵夫も之れを射ずとか申すこともあり、晋齋はもとより慈悲深い方でいらつしやるから、お内に二人のお若

さんが現れてごたくいたしている中でげすが、何うも見捨ておくことが出来なさらな
 い。直ぐ書生さんにお命じなされ、兎も角もと門外の男もまた男女を引立ようといたす
 若いものも共にお呼込みに相成りました。さて、段々と様子をおきくに成りますと、引
 立られようと致した男女は品川の和国楼から逃亡した花里と伊之吉でございます。晋齋
 老人は眉をひそめ、これは怪しからんことである、娼妓などを連れて逃亡するとは怪しか
 らん。伊之吉といえは勝五郎の世話で深川の大芳棟梁のとこへ養子にやつたお若の双児で
 あるなと思召しますから、いよく悔りなされて左の眼のふちの黒痣にお眼をお注けあそ
 ばしますと、ありく正にございますので、あゝ困ったものだ、併し不思議のこともある、
 親知らずに遣つた伊之吉が、母のお若がいる家の前で品川の貸座敷の若いもの等においこ
 まれ、己の家へ来るといふも因縁であると、何気なく花里の顔を御覧になると、これにも
 左の眼のふちに黒痣があつて男女差別こそありますが、貌だちから丈恰好がよく似てい
 る、これはとまた悔りなさいまして、花里に親の名をお尋ねなされると、大阪で越前屋佐兵
 衛と申しましたが、商業の失敗で零落いたし、親の為め苦海に身を沈めましたと、恥か
 しそうに物がたりますを晋齋老人とくとお聞きなされ、それではお前さんはお米といいま
 しょうと仰しやいます、花里も呆れいるところへ、奥の間から二人のお若さんがワツと泣

きながら転げ出で、

若「これ伊之吉やお米、お前の母は私ですよ」

と意外の言葉に伊之吉とお米もびつくり致し、たゞじろり／＼顔をながめるばかりでございます。晋齋老人は目をつぶつていらつしやいましたが、あゝ怖いものは因果だ、この親子は何うして斯うも幸ないであろうと、伊之吉お米が双児でありしことをお談しになつてお嘆きあそばす。この兩人もこれをきゝますと呆れるばかりで物がいわれません。やがて伊之助も岩次も出てまいり、親子兄弟不思議な邂逅めぐりあいにたゞ／＼奇異のおもいでござります。晋齋老人は花里のお米が身に付く借金を和国楼へ償却いたすことに相成り、この一埒いちちやうはつきました。さて伊之吉とお米でげすが双児きようだい兄あに妹いもうとときゝては、お互いに身を恥じ何うも添遂げることが出来ません。そこが因果で別れることも出来ないところから、この兩人はその夜のうち窃ひそかに根岸を脱出ぬけだし、綾瀬川へ身を投げて心中した。死骸よくあきが翌朝あした千住大橋際へ漂着いたしました。

こゝに又二人のお若さんでげすが、何うも解らずに其の晩はお休みになつた晋齋老人、いろ／＼お考えになるとツイと思ひあたられましたは離魂病という病で、この病は人間の身体が分身するもので、わかれている間は双方ともに何事もなく生きておれど、その分身

した身体が一つ所に集るときは二十四時のうちに一方の身体は消えてしまい、一方の身体はそのまゝ死ぬものと古い本などに書いてあることを思い出され、いよゝゝおどろいてお在でなさると、果して伊之助と一緒に来たお若さんの身体が二十四時たつと見えなくなつて、間もなく病人のお若さんの息が絶えました。伊之助も悔りいたして騒ぐをいろゝお諭しなされましたが、これも因果と諦らめ、遂にその夜のうちに首をくゝつて相果てました。わずか二日のうちに二夫婦と影法師のお若さんが亡くなり、晋齋老人の家は大さわぎでげす。これも因縁だ因果だと思召すから、それ／＼葬りのこと懇ろになされました。四人の死骸は谷中へ埋葬いたし、老人も落胆遊ばしていると、跡にとり残された岩次でございですが、まだ年も若いにいろゝ奇異のことを目前に見きゝいたし、両親に別れたんですから現世を味気なくぞんじ、また両親や兄弟の冥福を弔わんために因果塚を建立したから、仏門に入れてくれと晋齋にせまります。老人も至極道理のことゝ、ある住職にたのみ、岩次を仏門に帰依いたさせますと、それから因果塚建立という文字を染ぬきました浅黄の幟を杖にいたし、二年余も勸化にあるき、一文二文の浄財をあつめまして漸う谷中へ一基の塚をたてました。扱て永々続きました因果塚の由来のお話もこれで終りと致します。

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 巻の四」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年9月10日発行

底本の親本：「圓朝全集巻の四」春陽堂

1927（昭和2）年6月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を讀者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年6月30日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

根岸お行の松 因果塚の由来

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>